

大館遺跡群

大館町遺跡

—平成4年度発掘調査概報—



1993. 3.

盛岡市教育委員会

大 館 遺 跡 群

大 館 町 遺 跡

—平成4年度発掘調査概報—

1993. 3.

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市の北西部に位置する大館遺跡群は、古くは縄文時代草創期から古代にかけての埋蔵文化財を包蔵する歴史資料の宝庫です。これらの遺跡は盛岡市の歴史を語る上において貴重な歴史的資源であることは言うまでもありませんが、しかし近年の各種開発により遺跡群周辺は急激な変貌を遂げています。

これらの開発に伴い、かかる埋蔵文化財包蔵地の多くは破壊の危機に瀕しており、それに伴い記録保存という形で実施される事前緊急発掘調査も年ごとに増加する傾向にあります。

当市では文化財保護の立場から、国の補助事業として、大館遺跡群発掘調査事業を昭和55年度から実施してきておりますが、今年度は第3次5ヶ年計画の第3年度として、大館町遺跡において個人住宅新築に係る事前緊急発掘調査を実施しました。

その結果、縄文時代中期の竪穴住居跡5棟をはじめ、立石を伴う土壌墓など、新たに数多くの貴重な資料が発掘され、盛岡市の歴史を知る上において大変重要な成果をあげることができました。

本書は、その調査概報としてまとめたものですが、市民をはじめ、各機関・研究者等の方々に活用していただければ幸いと存じます。

最後に調査を実施するにあたり、指導・助言を下された文化庁記念物課並びに岩手県教育委員会文化課に対し深く感謝を申し述べると共に、調査にご理解・ご協力下さった地権者各位並びに地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

盛岡市教育委員会

教育長 佐々木 初朗

例 言

1. 本書は大館遺跡群大館町遺跡の平成4年度発掘調査概報である。
2. 本書は遺構および遺物の実測図など多くの資料の表示を怠りて、編集に八木光則・似内啓邦・小原俊巳・室野秀文・三浦陽一・内山陽子の協力を得て、千田和文が執筆した。
3. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系を座標変換した調査座標で表示した。
調査座標軸方向—第X系に準ずる
調査座標原点—X-32000.000, Y+24500.000
4. 高さは標高値をそのまま使用している。遺構平面図中、ピットの深さの数字はゴシック体が床面からの深さを表している。単位はcm。
5. 土層記号は堆積のしかたを重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層位ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層位の観察にあたっては『新版標準土色帖』(1967小山正忠・竹原秀雄)を参考にした。
6. 大館遺跡群の遺構記号番号は次のとおりである。

| 記号 | 遺 構 | 記号 | 遺 構 | 記号 | 番 号 | 縄文期遺構 | 1000 ~ 7999 |
|-----|-------|-------|-----|----|--------|-------------|-------------|
| | 堅穴住居跡 | RA | が | 跡 | | RF | 大館堤遺跡 |
| 建物跡 | RB | 溝 | 跡 | RG | 大館町遺跡 | 2000 ~ 5999 | |
| 柱列跡 | RC | 配石・築石 | | RH | 大新町遺跡 | 6000 ~ 6999 | |
| 土 壇 | RD | 井 戸 跡 | | RI | 小屋塚遺跡 | 7000 ~ 7499 | |
| 壜 穴 | RE | そ の 他 | | RZ | 前九年遺跡他 | 7500 ~ 7999 | |
| | | | | | 弥生~平安期 | 8000 ~ 8999 | |
| | | | | | 中・近世期 | 9000 ~ 9999 | |

7. 本遺跡関係文献で盛岡市教育委員会刊行のものは、『大館町遺跡—昭和51年度発掘調査報告』および『大館遺跡群(大新町遺跡・大館町遺跡)発掘調査概報』昭和55~平成元年度(10冊)、『大館遺跡群(大館町遺跡)発掘調査概要』平成2・3年度(2冊)の計13冊がある。

目次

序言

例言

目次

I 調査経過

1. これまでの調査……………1
2. 平成4年度の発掘調査……………7
3. 調査体制……………8

II 調査内容

1. 大館町遺跡第45次調査
(1)調査状況……………9
(2)縄文時代の遺構と遺物……………15
(3)縄文時代の遺物包含層……………53
2. 調査のまとめ……………73

表目次

- 表1 大館町・大新町遺跡の調査成果(1)……………2
表2 大館町・大新町遺跡の調査成果(2)……………5
表3 大館町・大新町遺跡の調査成果(3)……………6
表4 平成4年度の調査成果……………7

写真図版目次

- 写真1 大館遺跡群航空写真(1:8,000)
写真2 第44次調査 全景
写真3 第46次調査 遺物出土状況
写真4 第47次調査 早期の竪穴住居跡
写真5 第48次調査 調査状況

- 写真6 第45次調査 最終面全景(南から)
写真7 東半部5遺構群全景(南から)
写真8 北半部遺物包含層全景(北から)
写真9 RA4700竪穴住居跡(北東から)
写真10 RA4701竪穴住居跡(北西から)
写真11 RA4701遺物出土状況(1)・(2)
写真12 RA4702竪穴住居跡(北から)
写真13 RA4702石囲炉斯面・下部ピット
写真14 RA4703竪穴住居跡(西から)
写真15 RA4704竪穴住居跡(北から)
写真16 北東部土壌群全景(北から)
写真17 RD4800土壌(立石状態)(完掘状態)
写真18 RD4801土壌(立石状態)(完掘状態)
写真19 RD4802土壌
写真20 RD4803土壌、RD4805土壌
写真21 RD4806土壌
写真22 RD4807土壌
写真23 RD4808土壌
写真24 RD4809土壌
写真25 配石遺構の検出部位
写真26 RH4600配石遺構
写真27 RH4601配石遺構
写真28 RZ4600埋設土器遺構
写真29 RZ4601埋設土器遺構
写真30 遺物包含層検出状況(Ⅲa層上面)
写真31 遺物包含層土層断面(H4-Y22区)
写真32 遺物包含層土器出土状況(Ⅲa層)
写真33 遺物包含土製品・石製品出土状況
写真34 竪穴住居跡出土土器・埋設土器
写真35 遺物包含層出土土器(1)
写真36 遺物包含層出土土器(2)

挿図目次

- 第1図 大館町・大新町遺跡の位置(1:50,000)……………1
第2図 大館町・大新町遺跡調査区位置図(1:1,000)……………3・4
第3図 第45次調査検出遺構全体図……………11・12
第4図 第45次調査最終時全体図……………13・14
第5図 RA4700竪穴住居跡……………15

| | | |
|------|---|----|
| 第6圖 | RA4700竅穴住居跡出土遺物(1)..... | 17 |
| 第7圖 | RA4700竅穴住居跡出土遺物(2)..... | 18 |
| 第8圖 | RA4701竅穴住居跡..... | 21 |
| 第9圖 | RA4701竅穴住居跡出土遺物(1)..... | 22 |
| 第10圖 | RA4701竅穴住居跡出土遺物(2)..... | 23 |
| 第11圖 | RA4701竅穴住居跡出土遺物(3)..... | 24 |
| 第12圖 | RA4701竅穴住居跡出土遺物(4)..... | 25 |
| 第13圖 | RA4702竅穴住居跡..... | 27 |
| 第14圖 | RA4702竅穴住居跡出土遺物(1)..... | 29 |
| 第15圖 | RA4702竅穴住居跡出土遺物(2)..... | 30 |
| 第16圖 | RA4702竅穴住居跡出土遺物(3)..... | 31 |
| 第17圖 | RA4702竅穴住居跡出土遺物(4)..... | 32 |
| 第18圖 | RA4702竅穴住居跡出土遺物(5)..... | 33 |
| 第19圖 | RA4703・4704竅穴住居跡..... | 35 |
| 第20圖 | RA4703竅穴住居跡出土遺物(1)..... | 37 |
| 第21圖 | RA4703・4704竅穴住居跡出土遺物(2)..... | 38 |
| 第22圖 | RA4703・4704竅穴住居跡出土遺物(3)..... | 39 |
| 第23圖 | RD4800~4805・4807・4808土壇..... | 41 |
| 第24圖 | RD4806・4809土壇..... | 43 |
| 第25圖 | RH4600配石遺構..... | 46 |
| 第26圖 | RH4601竪石遺構..... | 47 |
| 第27圖 | RZ4600~4602埋設土器遺構..... | 48 |
| 第28圖 | RD4800~4803土壇出土遺物..... | 49 |
| 第29圖 | RD4804~4809土壇出土遺物、RZ4600・4601埋設土器..... | 50 |
| 第30圖 | RD4800~4802・4804・4807・4809土壇、RZ4601埋設土器遺構出土遺物 | 51 |
| 第31圖 | RD4800・4803土壇出土遺物..... | 52 |
| 第32圖 | 第45次調查遺物包含層土層断面..... | 55 |
| 第33圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(1)..... | 57 |
| 第34圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(2)..... | 59 |
| 第35圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(3)..... | 61 |
| 第36圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(4)..... | 62 |
| 第37圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(5)..... | 63 |
| 第38圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(6)..... | 64 |
| 第39圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(7)..... | 65 |
| 第40圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(8)..... | 66 |
| 第41圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(1)..... | 67 |
| 第42圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(2)..... | 68 |
| 第43圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(3)..... | 69 |
| 第44圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(4)・土製品(1)..... | 70 |
| 第45圖 | 第45次調查遺物包含層出土土器(2)..... | 71 |
| 第46圖 | 第45次調查遺物包含層出土土製品..... | 72 |

I 調査経過

1. これまでの調査

大館遺跡群は盛岡市の北西部、雫石川北岸の火山灰砂台地南縁部に立地する。遺跡群は西から大館遺跡群
大館遺跡群は盛岡市の北西部、雫石川北岸の火山灰砂台地南縁部に立地する。遺跡群は西から大館堤・大館町・大新町・小屋塚・前九年・館坂の6遺跡を包括したもので、当該地区における調査は大館町・大新町遺跡を中心として昭和55年度から継続的に実施してきており、本年度は13年目にあたる。

これまでの調査により、大館町遺跡は東西220m、南北250mの範囲と推定されており、大木大館町遺跡
8a～8b式期を主体とした竪穴住居跡群をはじめ、南端から西端部にかけては前期末葉から中期中葉の密度の濃い遺物包含層も確認されている。

大新町遺跡は大館町遺跡に東隣する台地に立地し、縄文時代草創期の爪形文土器群、早期前大新町遺跡
葉の竪穴住居跡およびそれに伴う押型文・沈線文土器が多量に出土したほか、中期の土壌群(貯蔵穴)や平安時代末期(11世紀)の竪穴・樹立柱建物跡等も検出されている。

さらに東側に位置する小屋塚遺跡からは、中期の竪穴住居跡のほか、直径2mを越える円形小屋塚遺跡



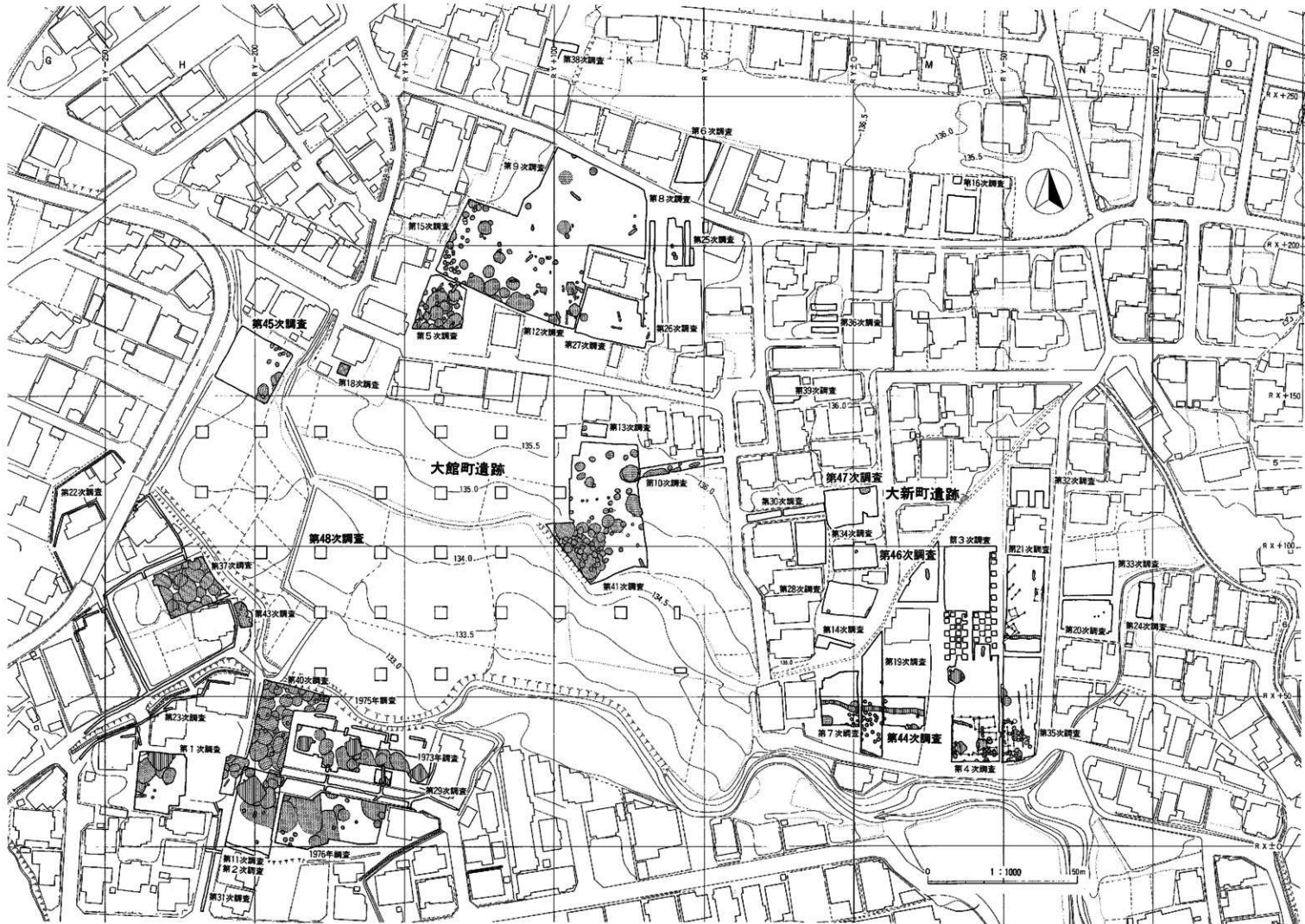
第1図 大館町・大新町遺跡の位置 (1:50,000)



写真1 大館遺跡群航空写真(1:8,000)

| 遺跡名 | 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期間 | 検出遺構 |
|-----|----|-----------|------|------|----------------------|--|
| 大館町 | 1 | 大館町147-6 | 住宅新築 | 330㎡ | 55. 8. 13~55. 12. 6 | 縄文時代中期竪穴住居跡10棟、土壇12基 奈良時代竪穴住居跡1棟、縄文時代遺物包含層 |
| 大館町 | 2 | 大館町147-11 | 住宅新築 | 325㎡ | 55. 8. 20~56. 7. 27 | 縄文時代中期竪穴住居跡12棟、土壇6基、 奈良時代竪穴住居跡1棟、縄文時代遺物包含層 |
| 大新町 | 3 | 大新町205-3 | 住宅新築 | 532㎡ | 56. 10. 3~56. 10. 27 | 縄文時代土壇2基、早期~後期の遺物包含層 |
| 大新町 | 4 | 大新町205-3 | 住宅新築 | 520㎡ | 57. 4. 21~57. 7. 28 | 縄文時代中期竪穴住居跡2棟、土壇21基、古代竪 穴住居跡3棟、建物跡・柱列跡6、遺物包含層 |
| 大館町 | 5 | 大新町16-9 | 住宅新築 | 231㎡ | 57. 6. 15~57. 8. 13 | 縄文時代中期竪穴住居跡16棟、土壇26基 |
| 大館町 | 6 | 大新町3-5 | 住宅新築 | 230㎡ | 57. 6. 18~57. 6. 25 | 遺構はなく、縄文土器片数点が出土 |
| 大新町 | 7 | 大新町205-8 | 住宅新築 | 196㎡ | 57. 8. 17~57. 8. 27 | 縄文時代中期竪穴住居跡2棟、土壇9基、 早期遺物包含層 |
| 大館町 | 8 | 大新町16-1 | 宅地造成 | 588㎡ | 57. 9. 13~57. 10. 22 | 縄文時代土壇7基 |

表1 大館町、大新町遺跡の調査成果(1)



第2図 大館町・大新町遺跡調査区位置図 (1:1,000)

| 遺跡名 | 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期 間 | 検 出 遺 構 |
|-----|----|--------------------|------|------|-------------------|---|
| 大館町 | 9 | 人新町16-1 | 宅地造成 | 400㎡ | 58.4.11~58.4.30 | 縄文時代中期竪穴住居跡2棟、土壇2基 |
| 大館町 | 10 | 大新町12-1 | 住宅新築 | 394㎡ | 58.5.6~58.6.18 | 縄文時代中期竪穴住居跡4棟、竪穴4棟、土壇17基 |
| 大館町 | 11 | 大館町147-10 | 住宅新築 | 72㎡ | 58.6.14~58.7.30 | 縄文時代中期竪穴住居跡15棟、土壇5基、奈良時代竪穴住居跡1棟、縄文時代遺物包含層 |
| 大館町 | 12 | 大新町16-1 | 宅地造成 | 720㎡ | 58.9.5~58.11.19 | 縄文時代中期竪穴住居跡1棟、竪穴3棟、土壇20基 |
| 大館町 | 13 | 人新町11-8 大新町12-1 | 住宅新築 | 450㎡ | 59.4.9.~59.5.30 | 縄文時代中期竪穴住居跡3棟、竪穴3棟、土壇10基 |
| 大新町 | 14 | 人新町17-2 | 住宅増築 | 26㎡ | 59.5.7~59.5.12 | 縄文時代早期遺物包含層 |
| 大館町 | 15 | 大新町16-1 | 宅地造成 | 726㎡ | 59.7.16~59.10.22 | 縄文時代中期竪穴住居跡、竪穴、土壇 |
| 大新町 | 16 | 人新町3-5 | 住宅新築 | 77㎡ | 59.11.27~59.11.29 | 遺物很少 |
| 大新町 | 17 | 大新町205-15 | 住宅新築 | 162㎡ | 60.4.8~60.4.30 | 縄文時代土壇1基、縄文時代早期遺物包含層 |
| 大新町 | 18 | 人新町10-11 | 住宅新築 | 15㎡ | 60.5.1~60.5.18 | 縄文時代中期竪穴住居跡1棟、土壇1基 |
| 大新町 | 19 | 大新町5-14 | 住宅新築 | 332㎡ | 60.6.3~60.7.30 | 縄文時代草創期~早期遺物包含層、中期土壇27基、平安時代溝跡2条 |
| 大新町 | 20 | 大館町205-39 | 住宅新築 | 174㎡ | 61.8.28~61.10.2 | 縄文時代早期遺物包含層 時期不詳の小柱穴 |
| 大新町 | 21 | 大新町5 9 | 住宅新築 | 413㎡ | 61.9.30~61.11.29 | 縄文時代草創期~早期遺物包含層 平安時代掘立柱建物跡5棟、柱列跡2列 |
| 大館町 | 22 | 大館町143-16 | 私設下水 | 72㎡ | 62.4.13~62.4.18 | 縄文時代中期遺物包含層 |
| 大館町 | 23 | 大新町7 | 私設下水 | 259㎡ | 62.5.19~62.8.6 | 縄文時代中期竪穴住居跡37棟、土壇7基 奈良時代竪穴住居跡1棟、土壇4基ほか |
| 大新町 | 24 | 大新町3 10 | 住宅新築 | 60㎡ | 62.6.1~62.6.10 | 縄文時代後期遺物包含層 |
| 大館町 | 25 | 大新町204-11 | 住宅改築 | 120㎡ | 62.6.15~62.6.17 | 縄文時代土壇3基 |
| 大館町 | 26 | 大新町16 15 | 私道整備 | 180㎡ | 62.10.15~62.10.24 | 縄文時代土壇2基 |
| 大館町 | 27 | 大館町16-62 | 住宅新築 | 320㎡ | 63.4.13~63.5.20 | 縄文時代土壇5基、小ピット10個 縄文時代遺物包含層 |

表2 大館町・大新町遺跡の調査成果 (2)

| 遺跡名 | 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期 間 | 検 出 遺 構 |
|-----|----|------------------------|-----------|------------|------------------|---|
| 大新町 | 28 | 大新町17-31 | 住宅改築 | 161㎡ | 63.5.24～63.6.16 | 縄文時代上層3基、小ピット11個 縄文時代遺物包含層 |
| 大館町 | 29 | 大新町6 | 私設下水 | 105㎡ | 63.7.9～63.9.16 | 縄文時代中期竪穴住居跡117棟、遺物包含層 古代竪穴住居跡1棟、土壇1基 |
| 大新町 | 30 | 大新町13-8 | 私道整備 | 65㎡ | 63.7.20～63.7.26 | 縄文時代遺物包含層、小ピット3個 |
| 大館町 | 31 | 大新町6 | 私設下水 | 66㎡ | 63.10.5～63.10.29 | 縄文時代遺物包含層 古代遺跡1条 |
| 大新町 | 32 | 大新町205-39 | 住宅新築 | 133㎡ | H1.4.10～H1.4.24 | 時期不詳の小柱穴8口 縄文時代早期～後期遺物包含層 |
| 大館町 | 33 | 大新町5-9 | 住宅新築 | 169㎡ | H1.4.19～H1.5.17 | 縄文時代早期～後期遺物包含層 |
| 大新町 | 34 | 大館町143-16 | 住宅改築 | 123㎡ | H1.5.10～H1.6.1 | 縄文時代土壇1基、 縄文時代遺物包含層 |
| 大館町 | 35 | 下野川字小原 塚5-10,5-11 | 住宅新築 | 401㎡ | H1.5.23～H1.9.30 | 縄文時代早期・後期竪穴住居跡4棟、中期土壇 30基、早～後期遺物包含層、平安時代柱列跡5条 |
| 大新町 | 36 | 大新町16-6 | 住宅新築 | 57㎡ | 2.9.10～2.9.19 | 遺構はなく、縄文土器片数点が出土 |
| 大館町 | 37 | 大館町143-9 | 住宅新築 | 302㎡ | 2.5.7～2.8.31 | 縄文時代中期竪穴住居跡41棟、竪穴4棟、竪立 柱建物跡2棟、土壇12基、古代の竪穴住居跡2棟 |
| 大新町 | 38 | 大新町8-13 | 住宅新築 | 121㎡ | 2.9.10～2.9.19 | 縄文時代中期土壇3基、 縄文時代中期遺物包含層 |
| 大新町 | 39 | 大新町14-1 | 住宅新築 | 133㎡ | 2.9.18～2.9.29 | 縄文時代土壇1基 縄文時代早期遺物包含層 |
| 大館町 | 40 | 大館町147-10・ 16・18・19 | 住宅新築 | 497㎡ | 3.4.8～3.8.31 | 縄文時代中期竪穴住居跡57棟、竪穴1棟、竪立 柱建物跡2棟、土壇16基、前～中期遺物包含層 |
| 大新町 | 41 | 大新町12-1 | 住宅新築 | 419㎡ | 3.5.7～3.9.7 | 縄文時代中期竪穴住居跡13棟、竪穴2棟、土壇 45基、遺物包含層、古代の竪穴1棟、溝跡1条 |
| 大新町 | 42 | 南青山町106- 14 | 公民館 建設 | 1,774 ㎡ | 3.6.24～3.6.28 | 遺構・遺物共になし。 |
| 大館町 | 43 | 大館町7-37 | 住宅増築 | 29㎡ | 3.9.6～3.10.9 | 縄文時代中期竪穴住居跡4棟、土壇2基、柱穴 51口 |

表3 大館町・大新町遺跡の調査成果 (3)

前九年遺跡のフラスコ形土壇群が多数確認され、さらに東側に広がる前九年遺跡からも中期の竪穴住居跡が点在して検出されたほか、早期中葉の貝殻条痕土器群、奈良時代の土壇墓および円形周溝などが確認されている。

大館町遺跡の平成3年度までの調査成果を総合すると、検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡350余棟、竪穴17棟、竪立柱建物跡4棟、土壇300余基を数える。

2. 平成4年度の発掘調査

平成4年度の大館町・大新町遺跡の発掘調査は4件の個人住宅新築に係る事前緊急発掘調査（表4）および1件の宅地造成工事に伴う事前の試掘調査を実施した（表4）。そのうち国庫補助事業で実施したのは、大館町遺跡第45次調査の1件（調査面積380㎡、国庫対象経費800万円）で、他は市費単独事業および事業主負担で実施された（5件の調査総面積は1,288㎡）。

第45次調査区は本遺跡の北西部の緩傾斜面に位置する。検出された遺構は少なく、調査区南東部で竪穴住居跡、北東部に土蔵基が検出されたほかは全域に縄文時代中期前葉から中葉にかけての部厚い遺物包含層が形成されており、大木7b～8a式期に相当する土器群をはじめとして多量の遺物が出土した。

また同遺跡では宅地造成工事の事前試掘調査として第48調査が実施された。調査は東西200m、南北100mの範囲に4m×4mのグリッドを20m毎に28箇所設定し、確認調査を行った。

| 遺跡名 | 次 数 | 所 在 地 | 調査原因 | 面 積 | 期 間 | 検 出 遺 構 |
|-----|-----|-----------|------|------|----------------|---|
| 大新町 | 44 | 人新町205-34 | 住宅新築 | 136㎡ | 4.4.13～4.5.11 | 縄文時代上葉4基、縄文時代草創期～早期遺物包含層、古代の竪穴住居跡1棟、溝跡1条 |
| 大館町 | 45 | 人新町213-1 | 住宅新築 | 380㎡ | 4.5.1～4.8.26 | 縄文時代中期竪穴住居跡5棟、基壇10基、配石道構2基、縄文時代中期の遺物包含層 |
| 大新町 | 46 | 人新町13-9 | 住宅新築 | 144㎡ | 4.8.17～4.9.18 | 縄文時代早期の遺物包含層 |
| 大新町 | 47 | 人新町17-25 | 住宅新築 | 196㎡ | 4.8.27～4.10.14 | 縄文時代早期竪穴住居跡1棟、早期の遺物包含層 |
| 大館町 | 48 | 大新町11-1外 | 宅地造成 | 432㎡ | 4.12.1～4.12.9 | 宅地造成（全体面積11,900㎡）に係る事前試掘調査。遺構密集区・遺物包含層等を確認。 |

表4 平成4年度の調査成果

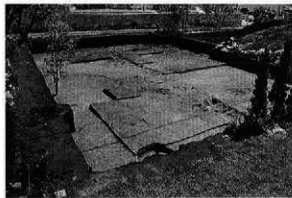


写真2 第44次調査 全景



写真3 第46次調査 遺物出土状況

その結果、遺跡中心部の本確認地域には南北に2本の低地が入り込み、遺跡の東西両端部も低地にかかることから、集落跡全体が3地点に分割され、さらにその周辺の低地には濃密な遺物包含層が形成されていることなどが判明した。

- 第44次調査** また大新町遺跡では第44・46・47次調査が実施された。第44次調査は昭和57年度に多量の早期前葉の押型文・沈線文系土器群を出土した第4次調査区の西側、昭和60年度に多量の草創期の爪形文系土器群を出土した第19次調査区の東側に隣接した畑地に位置している。検出遺構は縄文時代の土壇4基、奈良時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の溝跡1条のほか押型文・沈線文土器を主体とした遺物包含層も確認された。第46・47次調査区はさらにその北側70m、やや高い段根上に位置し、検出遺構は早期前葉の竪穴住居跡1棟および押型文・沈線文・貝殻文土器を主体とした遺物包含層が確認された。なお、同遺跡で押型文期の竪穴住居跡は平成元年度の第35次調査の3棟につき、4棟目の検出である。

3. 調査体制

| | | | | |
|------|---------|------------|--------|--------------|
| 調査体制 | 〈調査主体者〉 | 盛岡市教育委員会 | 教育長 | 佐々木初朗 |
| | 〈調査総括〉 | 〃 | 文化課長 | 川村 滋 |
| | 〃 | 〃 | 文化課長補佐 | 北田 光夫 |
| | 〈調査庶務〉 | 〃 | 文化財係長 | 佐藤 和男 |
| | 〈調査員〉 | 主査兼社会教育主事 | 八木 光則 | 主事 室野 秀文 |
| | | 社会教育主事 | 千田 和文 | 主事補 三浦 陽一 |
| | | 社会教育主事 | 似内 啓邦 | 文化財調査員 内山 陽子 |
| | | 主事兼社会教育主事補 | 小原 俊巳 | |

本調査の実施および報の作成にあたり、下記の各位よりご協力を賜った（敬称略）。

〈地権者〉 古田尚順、工藤博志、川辺 博、藤村 敏、菱和産業㈱

〈作業協力〉 阿部良子、伊藤由五郎、井上和子、大宮安子、大森キヌ、小原愛子、鎌田アエ子、鹿野奈保美、川村昭三、川村火盛、工藤繁子、工藤則子、工藤ミエ、小松愛子、斎藤 登、佐々木 聡、白澤和子、鈴木郁美、駿河チヨ、堰合賢吉、谷藤貴子、土田 恵、西野作じ、村山伊津子、村山久子、女鹿麗子、古田貴美



写真4 第47次調査 早期の竪穴住居跡



写真5 第48次調査 調査状況

Ⅱ 調査内容

1. 大館町遺跡第45次調査

(1) 調査状況

第45次調査区は大館町遺跡の北西部、遺跡西端を南流する農業用水路（小諾葛川）に接する調査区
南西向きの緩傾斜面の畑地に位置し、標高はおよそ134mをはかる。畑地の北側1/3程はか
の位置
つて水田として利用されており、調査前は一部盛土して畑地にし、現地地表下40～50cmに水田床
土が観察された。

市教育委員会による遺跡北西部での調査例はあまり多くなく、昭和60年度に東側に住宅増築
周辺の調査
工事に係る小規模な調査が実施され（第18次調査）、縄文時代中期（大木8b式期）の竪穴住
居跡1棟、土壌1基が検出、やや離れて北東部では昭和57年度に住宅新築に係る緊急発掘調査
（第5次調査）が実施され、縄文時代中期（大木8a・8b式期）の竪穴住居跡16棟、土壌26
基などが検出されている。また南東部の小諾葛川西岸では昭和62年度に下水道工事に伴う事前
調査（第22次調査）が行われており、中期前葉～中葉にかけての遺物を大量に出土する遺物包
含層が確認されている。

遺跡の南西部については比較的調査例が多く、古くは昭和31年9月に岩手大学学芸学部（当



写真6 第45次調査区最終面全景（南から）

時)と市教育委員会の合同調査が南西部の小瀧基川沿いで実施されており、その結果については『盛岡市史』等で発表されている(1958年 草間俊一「總説先史期」『盛岡市史』第1分冊1など)。また昭和48・50・51年にかけては遺跡南半部において宅地造成に伴う発掘調査が岩手大学考古学研究会によって実施され、縄文時代中期を主体とした竪穴住居跡が30棟以上確認されている(1978岩手大学考古学研究会『人並町遺跡—昭和51年度発掘調査報告』)。

遺構の時期 これらの調査成果からみると遺跡南部から南西部にかけては时期的に大木8a・8b式期を主体とした竪穴住居跡群および土溝群が多く検出され、前後する大木7式期および9式期についてはあまり多くない。ただし南～西部にかけての遺物包含層からは大木7a・7b式期の遺物も多く出土していることから、長期間に繰返された遺構の重複により、古い時期の住居跡ほど残存状況は良くないと思われる。また北半部の第12・15次調査では大木8a式期の竪穴住居跡、炬を持たない竪穴およびフラスコ形土壇等の遺構群がまとまりをもって検出されている。

検出遺構 今年度の第45次調査区からの検出遺構は、南東部から大木7a～8b式期に属する竪穴住居跡5棟、北東部の遺物包含層下部のIVa層上而から土壘群10基、さらにその下層のVIa層上而から配石遺構が2基検出され、また調査区全域には縄文時代中期前葉から中葉にかけての部厚い遺物包含層(Ⅲa・Ⅲb層)が形成されており、大木7b・8a式期を主体とした多量の遺物が検出されている。

基本層序 本調査区の基本層の詳細については後述するが、簡潔にまとめると、上部から耕作土および旧水田耕作土(Ia層)、黒色～黒褐色土(Ⅱa層)、スコリア粒および炭化物を含む黒褐色～暗褐色土(Ⅲa・Ⅲb層)、黒色土(Ⅳa・Ⅳb層)、黒褐色土(Va層)、暗褐色土～ぶい黄褐色土(VIa層)に大別され、さらにその下部は無遺物層の赤褐色～青灰色粗粒浮石(小岩井浮石・VIb層)、褐色～明黄褐色粘土(浪民火山灰・Ⅶ層)となる。

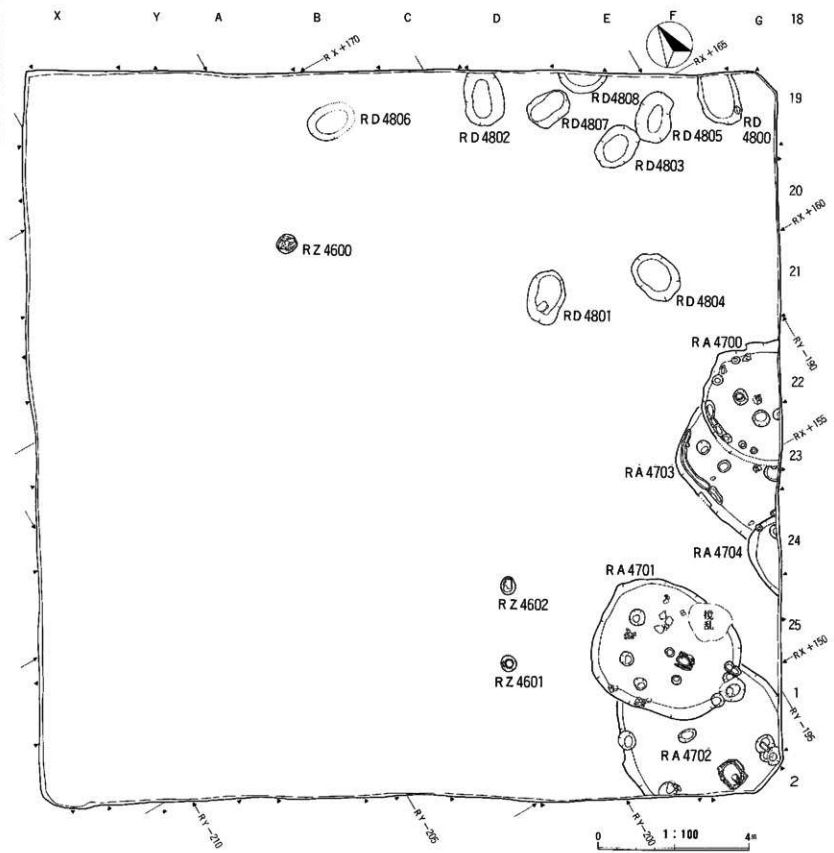
なお、Ⅱa層は縄文時代中・後期のやや希薄な遺物包含層、Ⅲa・Ⅲb層は中期前葉から中葉にかけて土器群を大量に出土する遺物包含層となっており、またVa層からも少量の早期の遺物が検出された。なお隣接する人並町遺跡のVa・Vb層からは縄文時代早期前葉の押型文・沈線文土器群、VIa層からは草創期の瓜形文土器群が大量に検出されていることから、本地点でもグリッドにより深掘精査をおこなったが、やや低地に位置することなどから同層群からの遺物の出土はみられなかった。



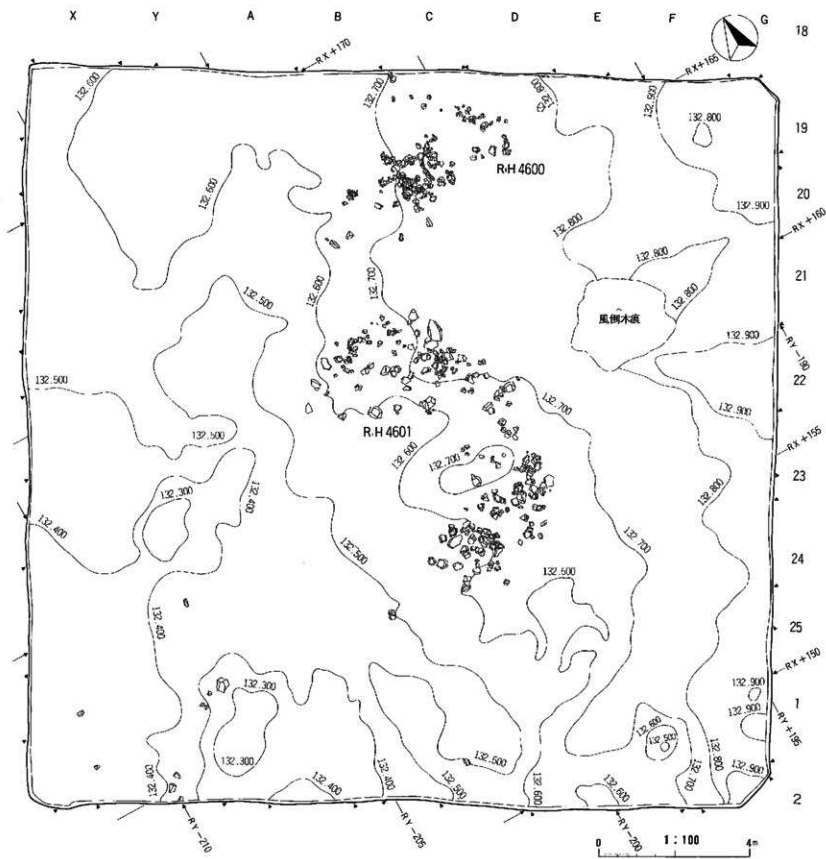
写真7 東半部遺構群全景(南から)



写真8 北半部遺物包含層全景(北から)



第 3 图 第46次調査検出遺構全体図

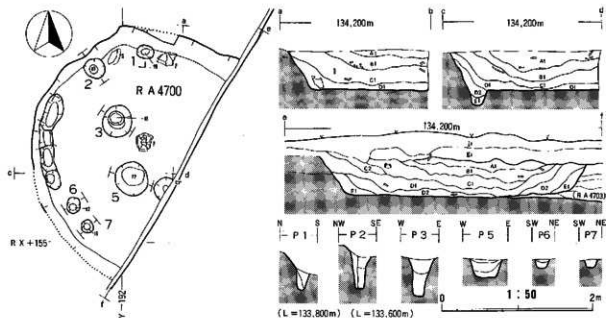


第4图 第45次調査最終時全体图

(2) 縄文時代の遺構と遺物

RA4700竪穴住居跡(第5～7図)

- 位置** 調査区東半中部。東側1/3程は調査区外に位置する。 **重複関係** RA4703を切る。
- 平面形・規模** 円形と思われるが、南東部は調査区外で、全体規模は不明。直径3.2m以上
- 掘込面** (当時の地表面) 削平されている。 **検出面** 遺物包含層黒褐色土(II a層)直下
- 埋土** 自然堆積 A層—黒褐色土主体で、粒～塊状の褐色土を少量含む。 B層—黒褐色土主体で塊状の黄褐色土を含み、炭化物・遺物ともに多い。 C層—黒褐色土主体で、粒～塊状の軟らかい褐色土を含む。 D層—住居跡床面直上に堆積する黒色土～黒褐色土で、粒状ないし粒～塊状の褐色土を含み、2層に細分される。 E層—住居跡壁面直下に堆積する黒色土で、粒状の褐色土を含む。
- 壁の状態** やや外傾し、立ち上がる。確認した壁高は0.4～0.53m。西壁直下に長さ1.25mにわたり、深さ0.2～0.3mの小ピットを4口の連ねた不整形な肩溝がめぐるが、南壁にはみられず、全周していない。
- 床の状態** 黒褐色土(IV a層)を床面にし、部分的に褐色土の貼床がみられ、ややかたい。なお調査区内では今は認められていない。
- 柱穴** P₁・P₂が直径0.25～0.4mで床面からの深さ0.4～0.5mと深く主柱穴と考えられるが、P₂の深さは0.25mと浅く、かつP₁・P₃・P₄についてはいずれも小規模なものである。
- 遺物の出土状況** 床面出土の遺物出は柱穴P₁・P₂間から大木8 a式期に相当する小形残鉢(第6図13)、石鏃(第7図20)およびか石に使用されたと考えられる自然石などが検出されている。その他は埋土出土のものが大半で、時期的には住居跡が古い時期の遺物包含層を掘り込んで構築されていることから、大木7 a・7 b式期の遺物も多い。



第5図 RA4700竪穴住居跡

土器（第6・7図） 1は隆沈線による文様をもつキャリバー形深鉢の口縁部で、上方に向く突起をもつものである。破片のため不明だが、口縁部に刻目および口縁内部にも隆線により渦巻文が施されている。2は大形キャリバー形深鉢の口縁部突起で、渦巻文が施されたもの、3は逆S字状突起をもつ人形キャリバー形深鉢で、口縁部文様は2条1組の沈線文で渦巻文等が施されている。4～10は隆線による文様が施されたものである。4は懸垂文およびそれらを連繋する弧状文、また懸垂文から派生する渦巻文等が配されたもの、5も同一個体で、渦巻文が施されたもの、8・9は平行に走る隆線間に波状文をもつものである。

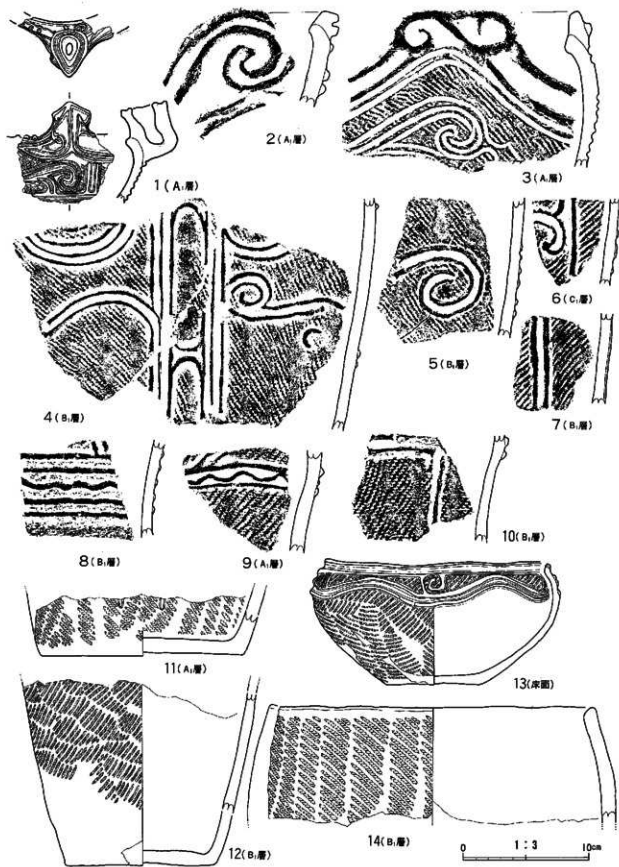
13は床面出上の小形浅鉢である。口径18cm、最大径19.5cmをはかり、口縁部および体部上半に隆線による波状文、小渦巻文をもつ。縄文地文は横位ないし斜位回転の単節斜縄文（LR）を施している。そのほか、粗製深鉢の口縁部（14）、体部下半～底部（12）、口縁部が外反する小形深鉢（17～19）などが出土している。

石器（第7図） 20は先端部を欠失した有柄凸基の石鏃、21は無柄凹基の石鏃、22も石鏃の未製品か。23～25は削器で、23は両面同刃のもの、24・25は不連続な調整剥離および敲打痕をもち、下辺に機能面をもつ。27は端部のみに剥離をもつもの、28は下辺に小剥離および機能面をもつものである。29は平坦面両面に磨面をもつ砥石である。

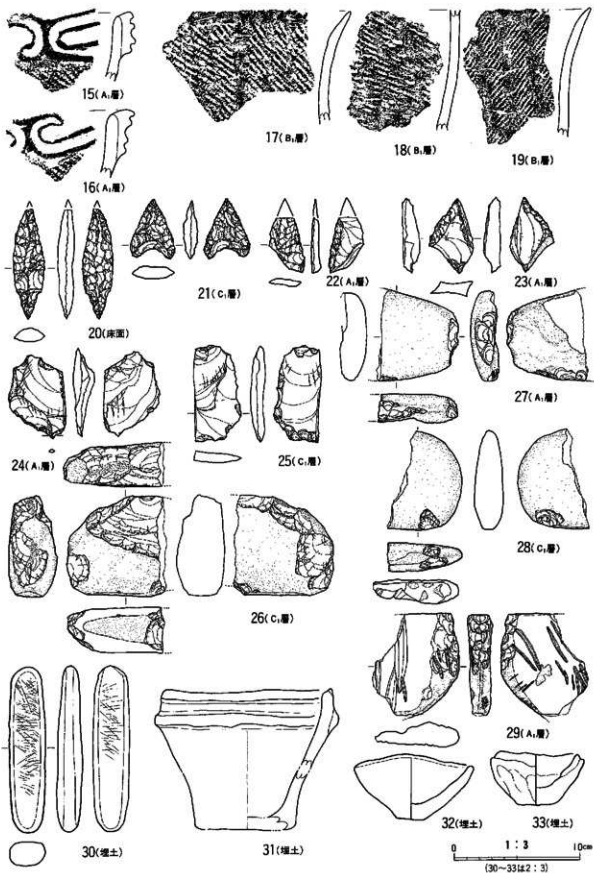
石製品・土製品（第7図） 30は平坦面両面に細かい擦痕をもつ偏平棒状の石製品である。31～33はミニチュア土器で、31は口縁部に隆線をもつもの、32は環形、33は手捏ねのものである。



写真9 RA4700整穴住居跡（北東から）



第6圖 RA4700壑穴住居跡出土遺物(1)



第7圖 RA4700竪穴住居跡出土遺物(2)

RA4701竪穴住居跡（第8～12区）

位置 調査区南端部 重複関係 RA4702を切る。

平面形・規模 隅丸長方形～栴門形を呈する。東壁の一部は擾乱のため不明。規模は長軸3.95m、短軸3.4m

掘込面(当時の地表面) 削平されている。 検出面 耕作土直下

埋土 自然堆積であるが、遺構埋土の大半は耕作のため削平され、A層のみがかろうじて残存している。

A層—黒褐色土主体で、粒～塊状の褐色土を含みやや軟質。炭化物・焼土粒もやや多く含まれる。

壁の状態 なだらかに外傾し、立ち上がる。確認できた壁高は南西部で0.2m、他は浅く0.05～0.1mをはかる。

床の状態 黒褐色土の遺物包含層(Ⅲa層)を床面にし、部分的に褐色土の貼床がみられ、ややかたい。

炉の状態 長軸線上南東寄りに石囲炉Bおよび小ピット状の地床炉Aがそれぞれ1基検出されている。石囲炉は準大の礫7割で構築されているが、北東部に灰石はみられない。規模は0.4×0.5mをはかり、火床面にはおよそ5cmのやや軟質の焼土層が堆積している。

柱穴 P₁、₂が直径0.4～0.45mで、床面からの深さ0.4～0.42mとやや大きく主柱穴と考えられるが、P₃は直径0.23m、深さは0.2mと浅く、かつP₁については炉Bの炉石の下部に位置するもので、直径0.3m、深さ0.3mをはかる。

遺物の出土状況 床面および南西壁直下から大木8b式期に相当する小形深鉢（第9図1～4）、大形深鉢（第10図6）などが出土している。また石囲炉の炉石には敲打磨石（第11図28）、敲石（第12図29・33）

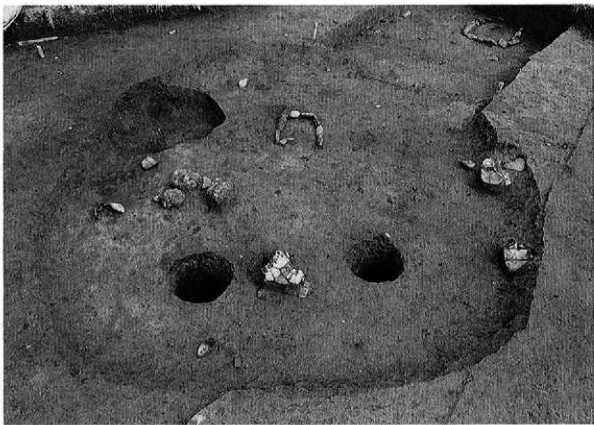


写真10 RA4701竪穴住居跡（北西から）

などが転用され、さらに石囲炉の北側1mの位置に人頭人の粘土塊が3個検出されている。なお住居跡は古い時代の遺物包含層を掘り込んで平坦に構築されているが、床面内部からは大木7a・8a時期の遺物も確認されている。

土器 (第9～12区) 1は口縁部がやや大きく屈曲し、体部最大径が下半部にある器形を呈するキャリバー形深鉢である。文様帯は隆沈線によるもので、口縁部に4単位の山形の幅状把手をもち、把手間は端部に小渦巻文を配した隆沈線により逆襲され、口縁部文様帯はさらに分割され、8単位の楕円形区画内に2段の短沈線が施されている。体部文様帯と区画する頸部には平滑に磨かれた幅広の無文帯が介在し、さらに2条の横位平行隆沈線も巡らされている。体部文様帯は懸垂文や大渦巻文およびそれらを繋ぐ有棘渦巻文等で構成され、縄文地文は縦位の縦筋斜縄文(RL)が施されている。口径22cm、器高23cm、底径7cmをはかる。

2～4は口縁部が無文で外反ないし外傾する器形の小型深鉢である。2は口縁部を欠く小型深鉢で、体部から直線的に外傾する器形を早する。体部文様帯は隆沈線によるもので、中央部に有棘渦巻文を配し、上下および横位方向に展開させている。3も同様の文様をもつもので、中央部には有棘の円文が配されている。口径12cm、器高15cm、底径6.5cmをはかる。

4は頸部の隆沈線下に円形刺突列をもつもので、体部文様帯は2単位で渦巻文を中心に弧状文・懸垂文等で構成されている。口径17.5cm、器高22cm、底径7cmをはかる。2～4いずれも縄文地文は縦位の縦筋斜縄文(RLR)が施されている。

6は口縁部が内湾する器形の大型深鉢である。推定器高は約51cmで、破片のため全体の文様構成は不明だが、ゆるい波状口縁で、楕円形ないし長楕円形の区画文をもち、体部には2本1組の隆沈線で描かれた大渦巻文、それから垂下する懸垂文および周辺には小渦巻文等が施文されている。7は浅鉢ないしキャリバー形深鉢の口縁部と考えられるもので、隆沈線による渦巻文が施文されたものである。

10は屈曲する器形を呈するもので、壺形ないし鉢形土器の口縁部と考えられる。

12～18は口縁部が外反ないし外傾する器形をもつものである。12・15は山形の複合口縁で、12は頂部に円文を配し、体部文様帯は3条1組の垂下する沈線文が施されている。15の頂部には渦巻文が施され、体部には3条1組の細沈線による平行沈線文等が施文されている。13は無文のゆるい波状口縁で、頸部に3条1組の平行沈線文をもつもの、14は口唇部直下から縄文地文が施されたもので、同様に頸部には3条1組の平行沈線文が施されている。

19・20は粗製深鉢で、19は直立する口縁部で降線状にナデ調整を施したもので、20は内湾する器形のための隆線を貼付けたものである。

石器 (第11・12区) 21は先端部および基部を欠失した無柄凹基の石鏃、22は断面三角形のやや部厚な石鏃様の石器で、端部の磨滅痕から石鏃と考えられる。23は自然面を残した板状剥片を利用した石鏃で、機能部は両面から調整剥離がなされている。

24・27はともに自然面を残した縦長剥片を利用した削器ないし搔器で、24は上下両端に調整剥離を施したもので、下端は搔器様の刃部をもつ。27は特に下端に入念な調整剥離をもつ削器である。25・26は背腹両面に不連続な調整剥離をもつ削器である。

28は炉石に転用されていた敲打磨石で、下端の一部および一側面に大きな剥離をもつもので、機能面も下辺の一部のみに観察されるものである。29・33もか石に転用されていた敲石で、29の下半部は火熱を受けた痕跡が認められる。敲石としての使用痕は少なく、端部および下辺にやや深めの敲打痕

が認められる。33は長期間火熱を受けており、かなり脆く二つに欠損している。敲打痕は両端面、上下両辺に認められる。

30は有溝砥石の破片、31はほぼ全面に敲打痕および敲打磨面を成石、32は平坦面に敲打痕をもつ敲行である。

土製品・石製品(第12図) 34は扁平の有孔石製品で、直径3.4~3.8cm、厚さ1.4cmをはかる。軟質の凝灰岩を使用しており、一部整形時の擦痕も観察される。

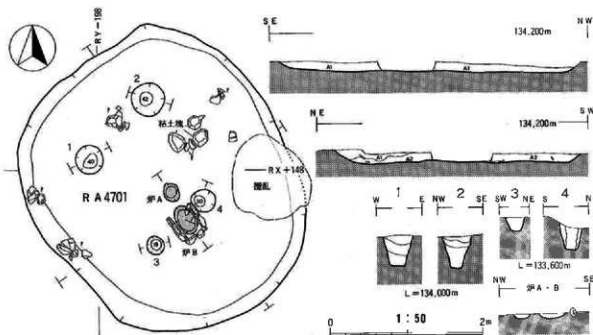
35は十瓣状の土製品で、長軸中央部に細い貫通孔をもつものである。長さ2.4cm、直径1.5cmをはかる。36はミニチュア土器の脚部と思われ、内側には工具による沈線文が描かれている。37は文様をもつミニチュア土器で、平行沈線文・円文および懸垂文が施されて、縦位の板節斜縄文(RLR)も施文されている。口径5.5cm、器高10cm、底径3.5cmをはかる。



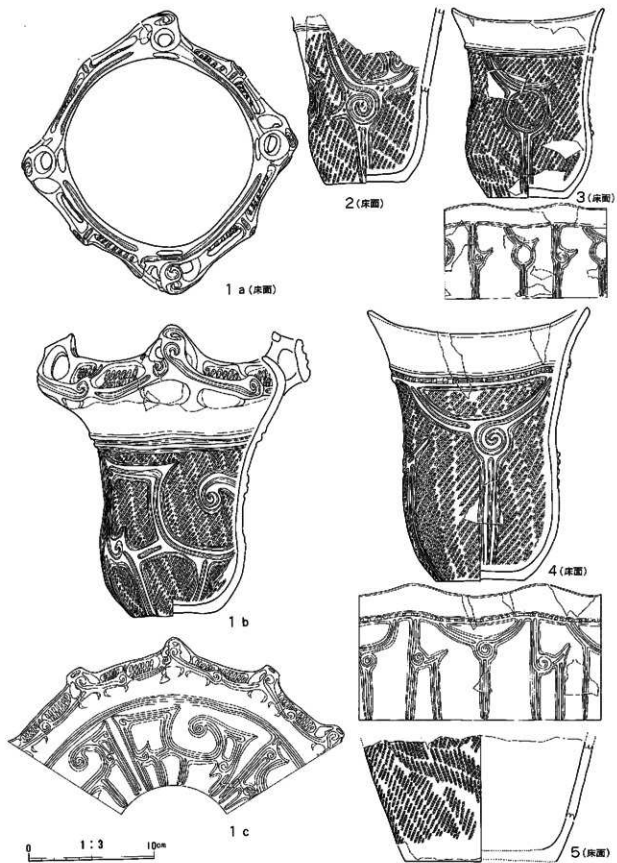
写真11-a RA4701 遺物出土状況(1)



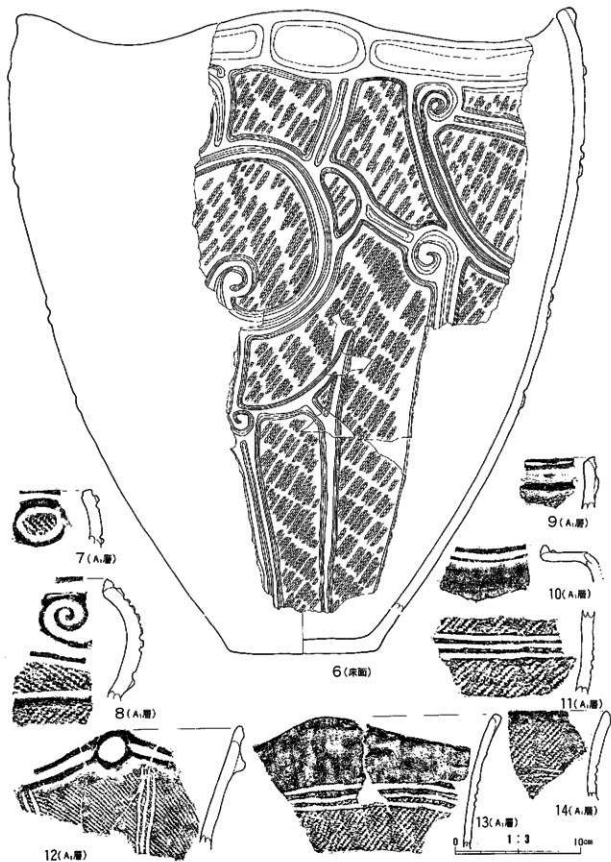
写真11-b RA4701 遺物出土状況(2)



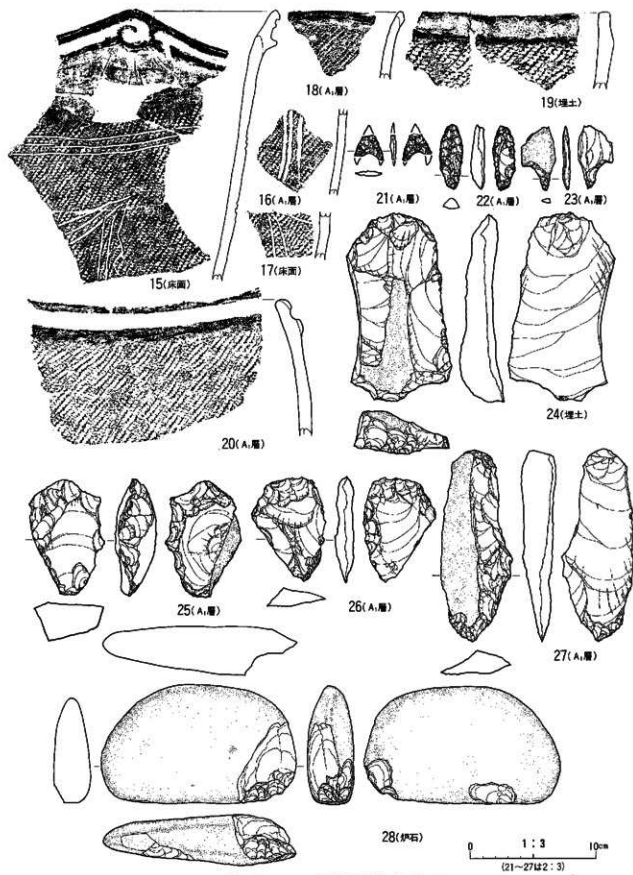
第8図 RA4701竅穴住居跡



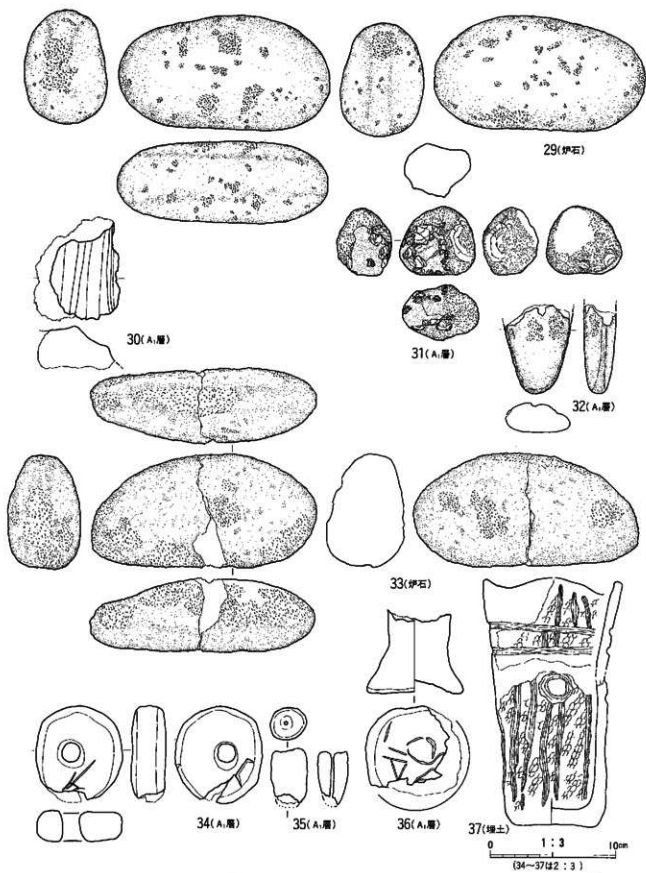
第9圖 RA4701 堅穴住居跡出土遺物 (1)



第10圖 RA4701竇穴住居跡出土遺物 (2)



第11図 RA4701竪穴住居跡出土遺物(3)



第12図 RA4701竪穴住居跡出土遺物(4)

RA4702竪穴住居跡（第13～18図）

位置 調査区南端部 重複関係 北半部でRA4701に切られ、中央部ではRD4809を切る。
平面形・規模 南半部は調査区外で不明だが、ほぼ楕円形を呈するものと思われる。長軸は南北方向で4.5m以上、短軸は4.35mをはかる。掘込面（当時の地表面）削平されている
埋土 自然堆積 A層—黒褐色土を主体とし、塊状の褐色土を少し含む。2層に細分され、下半部のA₁層にはやや炭化物も多く含まれている。

B層—黒色～黒褐色土を主体とし、粒～塊状の褐色土を少量含む。3層に細分される。

壁の状態 残存状況は悪く、断面で確認した壁高は西半部で0.26m、北半部では0.1m程である。

床の状態 遺物包含層（Ⅲa層）を平坦にして床面としているが、あまりかたくない。

炉の状態 中軸線上、やや南寄りに長方形石囲炉を検出。規模は0.75×0.65mをはかり、大小12個程の礫で構成されている。火床面は0.4×0.55mの楕円形を呈し、南寄りに口縁部北向きに斜位状態の埋設土器も検出されている。か内の焼土は軟らかく、およそ10cmほどの堆積をもつ。また石囲炉下部から床面を10cm程掘り込んだ不整形の落ち込みを確認。内部から直径0.2～0.45mの大小3個の柱穴を確認している。

柱穴 本住居跡の主柱穴はP₁・₁₁・₁₂・₁₃で、南北方向の中軸線に対して東側柱にはP₁・₁₃、西側柱にはP₁₁・₁₂が相当し、P₁・₁₂ではそれぞれ掘り方が住居の外方に向けて掘られている。規模に多少の差異は

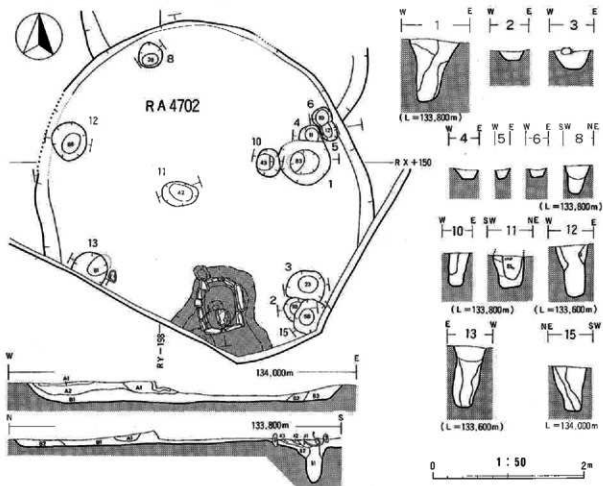


写真12 RA4702竪穴住居跡（北から）

あるが、直径0.45～0.65m、床面からの深さはP₁₀で0.58m、最も深いP₁では0.83mをはかる。

また中軸線上には棟持ち柱と考えられるP₁₀が位置するが、規模はやや小さく、直径0.3～0.45m、深さは0.38～0.42mをはかる。

遺物の出土状況 石囲炉内部からは斜位に据えられた埋設土器（第14図1）が検出されている。また炉内の堆積土からも小破片（第14図6・10）が出土している。床面出土の石器には、石鏃（第16図29・30・



第13図 RA4702竪穴住居跡

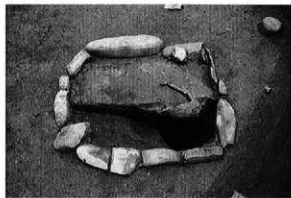


写真13-a RA4702 石囲炉断面

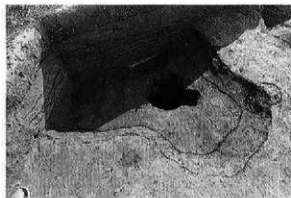


写真13-b RA4702 石囲炉下部ピット

34)、凹石(第17図47)、大形の台石(第18図48)などがある。また石囲炉の炉石には、台石状の敲打痕を有するもの(第18図49)、石皿の破片(第18図50)などが転用されている。

土器(第14・15図) 1は口縁部を欠く小形深鉢で、火熱を受けやや脆くなっている。頸部に3条1組の横位平行沈線文をもち、体部文様帯も3条1組の沈線文により緩い渦巻文、波状懸垂文等で構成されている。残存器高19.5cm、体部最大径15.5cm、底径6.5cmをはかる。2・3は大きく外反する波状口縁をもつ小形深鉢である。2は底部のみが欠損しており、頸部に3条1組の平行沈線文、それから垂下する2条1組の波状懸垂文が施されている。口径13.5cm、推定底径7.5cm、残存器高15.5cmをはかる。3は2条1組の沈線文で描かれているもので、頸部に2組の平行沈線文、体部は波状懸垂文・懸垂文および弧状文等が施されている。口径12.5cm、器高17.5cm、底径6.5cmをはかる。1～3ともに縄文地文は縦位複節斜縄文(R.T.R.)が施されている。

4～9・11は大きく外反する波状の複合口縁をもつ深鉢である。4・8のように山形の波頂部に隆線による渦巻文をもち、口縁部直下から縄文地文の施されたもの(4・8)と口縁部直下に無文帯をもつもの(6・7・9・11)とがある。体部文様帯は4～6は沈線により描かれており、7は隆沈線により施文されている。10はやや丸みをもち肥厚した口縁部、12・13は幅広い隆沈線が施された深鉢の体部破片、14は体部下半の破片で、2条1組の懸垂文がみられる。

15～23はキャリバー形深鉢の一群である。口縁部は平縁が多く、文様帯は隆沈線を主体として施文されているもの(15・18・19)と、沈線を主体として施文されているもの(16・17・20～22)とがある。

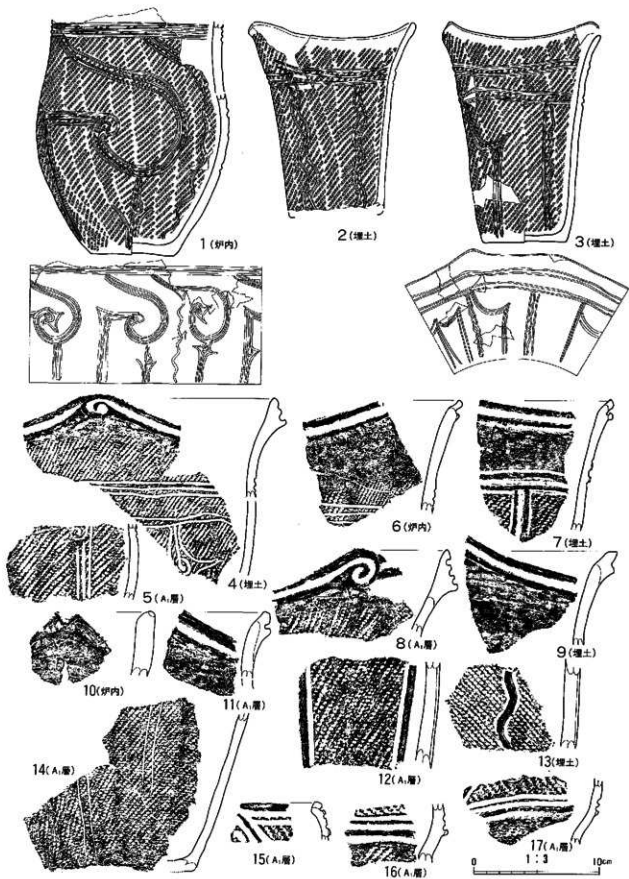
18は口縁部に平行な2条1組の隆沈線で構成されているもので、小渦巻文、連繋する栴門区画文等が施されている。19～21の口縁部文様帯は波状文ないし山形文で構成されるもので、巻きの緩い渦巻文が付加されている。23は口唇部から横に突き出す刻目付の突起をもつものである。これらは前述の土器群(1～9)に比べ、古い時期に相当するものである。

24～26は口縁部の内湾する粗製深鉢、27・28は深鉢の体部～底部ないし体部下半で、ともに縄文地文は縦位の複節斜縄文(L.R.L.)が施されている。

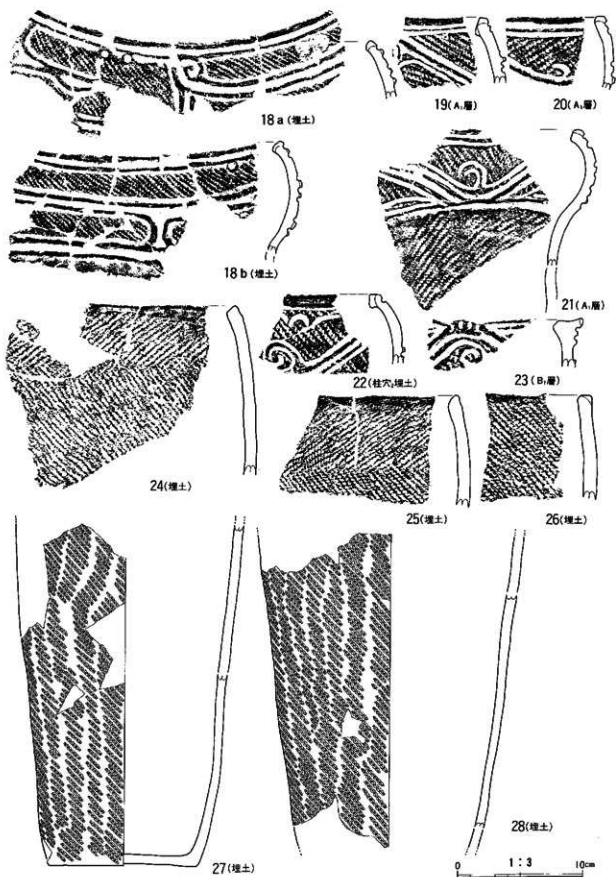
石器(第16～18図) 29は無柄凹基の石鏃で脚部に丸をもつもの、30～34は有柄凹基の石鏃で、30は両側縁が直線的なもの、31・32は先端部に丸をもつものである。33・34は先端部がやや突出する形状を呈するものである。36～38は削器で、38は背面の側縁に調整刻線をもつもの、34はつまみの欠損した石造の可能性もある。39～41は自然面を残す両面ないし片面調整石器、42は各面不定方向から打撃の加えられた石核である。

43・44は敲打磨石である。43は両端部ないし上辺に剥離および敲打痕をもち、下辺の機能面があまり使用されていないものである。44は1/3程を欠失するもので、上辺から端部にかけて剥離および敲打痕が認められ、下辺の機能面も幅広く使用されたものである。45～47は凹石である。45は偏平楕円礫の両面に浅い敲打痕をもつもの、46は平坦面および両側縁に浅い敲打痕をもつもの、47は凝灰岩質のもので、両平坦面にやや深い敲打痕、全面にも浅い敲打痕が認められる。48・49は床面出土および炉石に転用された敲打痕をもつ台石で、48は残存する長さ29.5cm、幅16.5cm、厚さ11.5cmをはかる。50は平滑な使用面をもつ石皿の破片である。

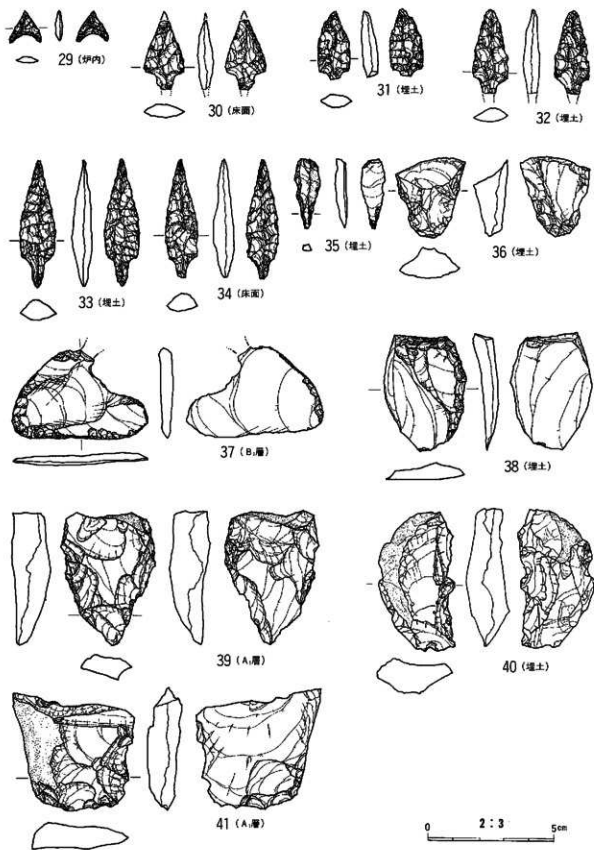
土製品(第18図) 51・52ともに土偶の破片である。51は腕部と考えられ、表裏両面とも3条1組による平行沈線文が施されたもの、52は胴部で、表面は爪形状の短沈線が横位ないし斜位に並列に施文、裏面は側面に縦位並列に施文された爪形状短沈線に加え、鋸歯状沈線文が施されたものである。



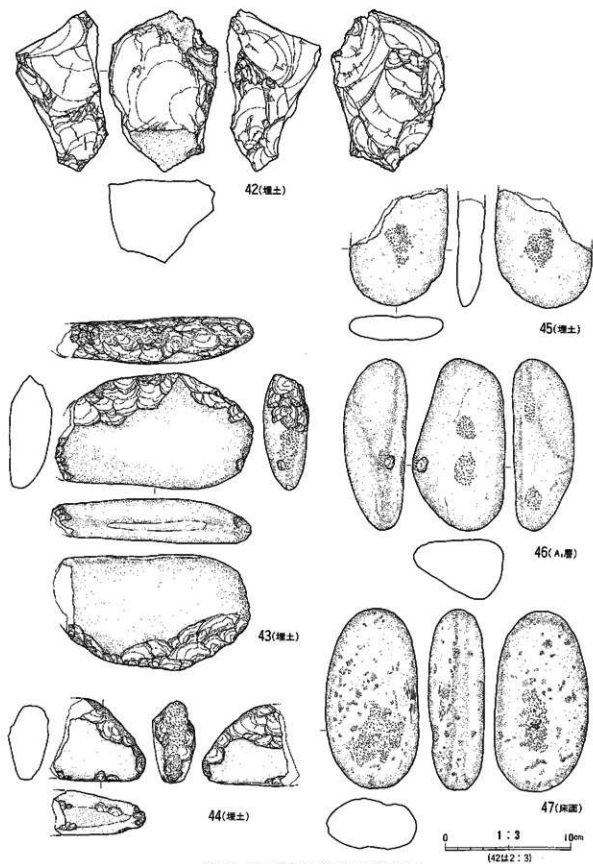
第14图 RA4702整穴住居跡出土遺物(1)



第15圖 RA4702竪穴住居跡出土遺物(2)



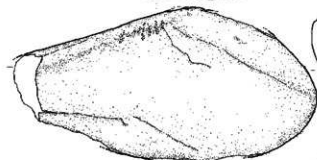
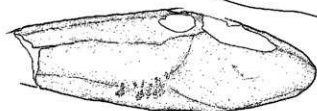
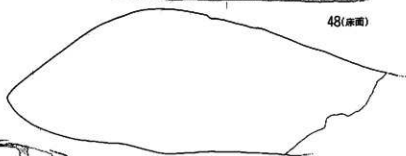
第16圖 RA4702竪穴住居跡出土遺物 (3)



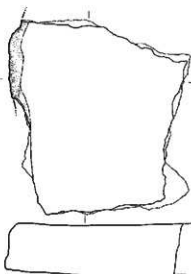
第17図 RA4702整穴住居跡出土遺物(4)



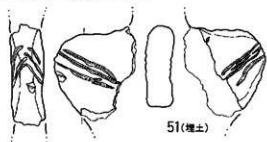
48(麻面)



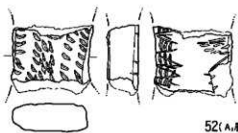
49(伊石)



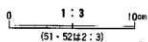
50(伊石)



51(埴土)



52(A層)



第18圖 RA4702竪穴住居跡出土遺物(5)

RA4703竪穴住居跡 (第19~22区)

位置 調査区東半中央部、住居跡の南側1/2ほどは調査区外のため不明

重複関係 北半部をRA4700に、南半部をRA4704に切られる。

平面形・規模 北半部の形状から四角長方形と思われる。全体規模は不明だが、長軸4.0m以上、短軸3.5mをはかる。 **掘込面**(当時の地表面) 削平されている。 **検出面** 遺物包含層(Ⅱa層)直下

埋土 自然堆積 A層—黒褐色~暗褐色土主体。粒~塊状ないし塊状の暗褐色土を含み、スコリア粒・炭化物も含有。7層に細分される。

B層—黒色土主体。粒状ないし塊状の黒褐色土を少量含む。3層に細分される。

C層—黒褐色土主体。塊状の黒色土をやや多く含む。単層。

壁の状態 ほぼ垂直に近い壁で、確認した壁高は0.45~0.5m。北半部の壁下に不連続の周溝がみられる。深さ0.1~0.2m前後の溝状ないしところどころで柱穴状を呈する。

床の状態 黒色土の遺物包含層(Ⅳa層)を床面とし、部分的に褐色土の貼床がみられ、ややかたい。なお、調査区内では炉は確認されていない。

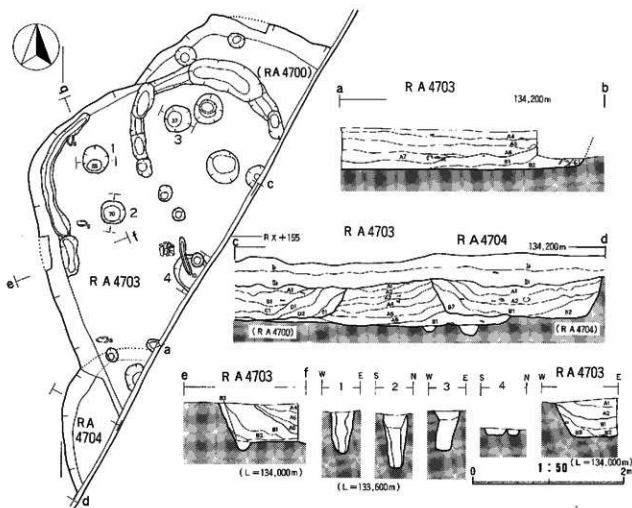
柱穴 P₁~₃が主柱穴と考えられるが、RA4700の柱穴も重複しており判然としない。P₁~₃は直径0.3~0.35m、床面からの深さは0.5~0.7mをはかり、P₁・P₂では柱痕跡も確認される。P₄は中軸線上に位置するピットで、直径0.45m、深さは8cm程度で浅い。

遺物の出土状態 床面出土の土器には、小形深鉢(第20図2)、隆線および半裁竹管文が施されたもの(第20図3・6・19)、石器では敲打磨石(第22図59)、磨面をもつ敲石(第22図63)、また主柱穴P₂からも敲打磨石(第22図62)が出土している。埋土出土では、B₁~₃、A₁層出土の遺物が多い。



写真14 RA4703竪穴住居跡 (西から)

土器(第20図) 1は体部から口縁部まではほぼ直線的に外傾する器形を呈する深鉢で、口唇部に大小の山形突起をもつ。口縁部直下には原体疔痕による文様帯が構成されており、山形突起に沿う形で原体疔痕文、その下部にも振幅の大きい波状の原体疔痕文等が施されている。体部縄文地文は縦位回転の結束のある半節斜縄文(RL・RL)か。底部を欠損しているため推定ではあるが、器高25.5cm、口径24cm、底径12.5cmをはかる。2は内湾気味に外傾する平縁の口縁部をもつ小形深鉢で、口縁部に2条の平行な原体疔痕、体部には隆線による山形ないし弧状の貼付けをもち、その上部にも隆線に沿うように弧状の原体疔痕が施されたものである。縄文地文は頸部に稜をもった幅の狭い無文帯を介させ、それ以下に横位の無節斜縄文(L)が施されている。口径13cm、底径8.5cm、器高15cmをはかる。3～5は沈線が施文された外傾～内湾する口縁部破片で、櫛目状ないし鋸歯状の文様が施されたものである。6～7は半截竹管による文様が施文された一群である。6・7は大形深鉢の波状口縁の破片で、隆線の側縁を交互に刺突して波状を構成したもの、隆線下に指頭疔痕を加えた貼付け等の特徴とする。また6では、口唇部に棒状工具による3個の刻口、7～14では半截竹管による押し引き状・渦巻状・波状の沈線および竹管による円形刺突文等が施文されている。17～19は半截竹管による平行沈線文が口縁部に施されたもの、16a～eは同一個体で、4単位の波状口縁をなす人形深鉢で、口縁部文様帯



第19図 RA4703・4704竈穴住居跡

はへら状工具で交互刺突を付け加えた隆線によって構成されて、縄文地文は口縁部から体部まで横位の単節羽状縄文（RL・LR）が施されている。そのほか、縄文地文のみのキャリバー状を呈するもの（20）、原体正痕による文様帯をもつもの（21～31）、横位回転を主体とした縄文地文をもつ粗製深鉢の破片（33～42）、口唇部が肥厚した無文の鉢形土器（45・46）等がある。

石器（第22図） 53は柳葉状の形状を呈する石槍で、表裏面ともに入念な調整剥離がなされたものである。長さ9.6cm、幅2.6cm、厚さ1.6cmをはかる。54は有柄凸基の石鏃であるが、基部は欠損している。

55・56は削器で、56は1/2を欠失しているが、小剥片を利用したもので、背面に刃部調整がなされているもの、55は大形の厚手の剥片を利用した両面両刃のもので、下辺はピック状を呈する。59～62は敲打磨石で、59は偏平楕円盤を使用したもので、下辺に剥離および機能面、上辺・端部および両平坦面にも剥離および敲打痕が認められる。56は偏平楕円盤の下辺のみに小剥離および機能面をもつもの、61・62は小礫を利用したもので、下辺一辺のみに機能面が認められる。63は側縁に磨面をもつ敲石で、他は全面に敲打痕が認められる。

RA4704 竪穴住居跡（第19・21・22図）

位置 調査区東半中央部、住居跡の大半は調査区外のため不明 **重複関係** RA4703を切る。
平面形・規模 円形か。直径2.3cm以上をはかる。 **掘込面**（当時の地表面）削平されている。

検出面 遺物包含層（Ⅱa層）直下

埋土 自然堆積 A層—黒褐色土主体。粒～塊状の褐色土を含み、スコリア粒も含有。2層に細分される。

B層—黒色～黒褐色土主体。粒～塊状の褐色土を少量含みやや軟質。3層に細分される。

壁の状態 外傾しながら立ち上がり、確認した壁高は0.4～0.5m。

床の状態 黒色土の遺物包含層（Ⅳa層）を床面とし、ややかたい。なお、調査区内ではか・柱穴等は確認されていない。

遺物の出土状況 埋土A・B各層から土器が出土したほか、石器では床面から石匙（第22図57）が検出されている。

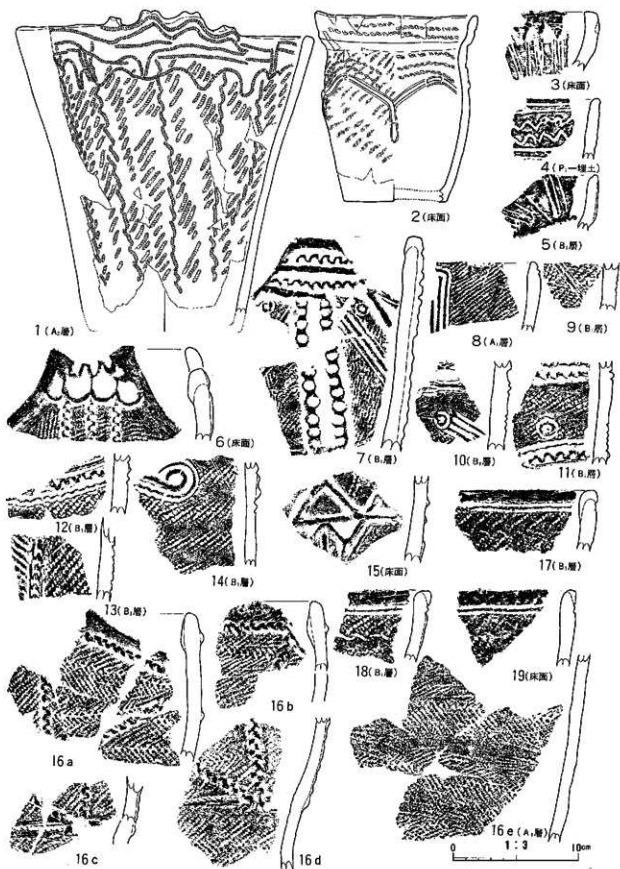
土器（第21図） 47は平縁のキャリバー形深鉢で、口唇部および口縁部に隆線を使用したほかは、沈線による文様が施されたものである。口縁部は横位に展開する隆線によって区画されており、隆線上に円形刺突文、頸部以下は平行沈線文・波状沈線文等が密に施文されている。



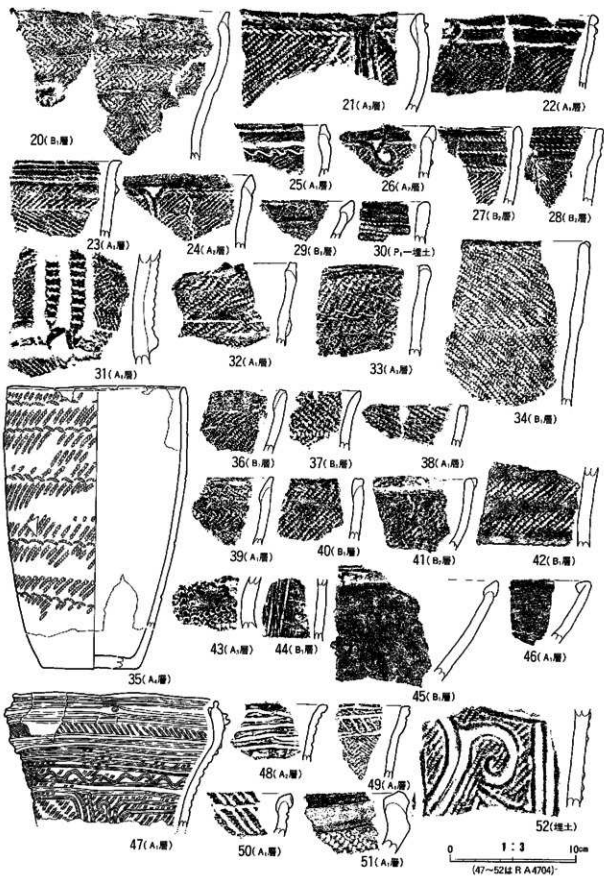
写真15 RA4704 竪穴住居跡（北から）

48～50は外反ないし外傾する口縁部をもつ深鉢で、沈線文による文様をもつもの、51は浅鉢の口縁部か。52は深鉢の体部破片で、文様帯は調整なしの隆線による渦巻文・懸垂文等が施されたものである。

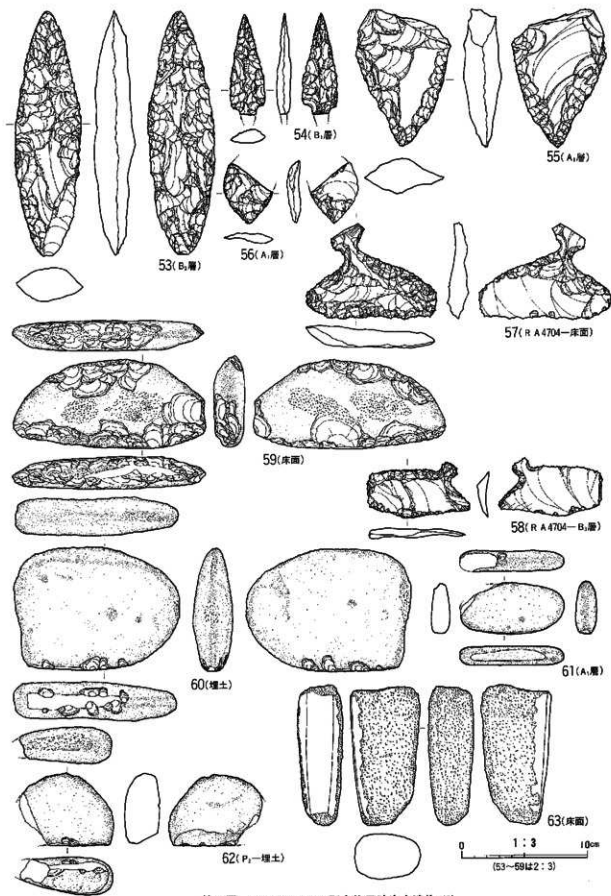
石器（第22図） 57・58は横形の石匙で、斜位方向につまみが付けられたものである。背面は刃部および周縁部ともに調整剥離が施されているが、腹面はつまみ部分の調整剥離のみのものである。



第20圖 RA4703竪穴住居跡出土遺物 (1)



第21圖 RA4703・4704竪穴住居跡出土遺物(2)



第22図 RA4703・4704竪穴住居跡出土遺物(3)

R D4800土墳 (第23・28・30・31図)

プラン 楕円形 規模 上端1.5m以上×1.05m、底面1.3m×0.8m 主軸方向 N7° E

掘込面 削平されている 検出面 II a層直下

埋土 自然堆積 A層一暗褐色土主体。粒状の褐色土を含み、ややかたい(スコリア粒多量含有)。

B層一黒褐色土主体。粒～塊状の褐色土を含み、やや軟質(スコリア粒少量含有)。

壁の状態 ほぼ垂直に立ち上がる 壁高0.25～0.35m 底の状態 ほぼ平坦だが、あまりかたくない。

その他の施設 南東壁寄りに立石が検出されている。底面からはほぼ垂直に据えられたもので、幅15cm、厚さ18cmでやや扁平であるが、長さ49cmをはかる。

出土遺物 埋上から大形の突起をもつ深鉢(第28図1・2)、隆線による渦巻文などが配された浅鉢(同6)、また土偶2点(第31図41・42)、石剣(同43)、石核(第30図33)、土製品(第31図40)などが検出されている。また土墳底面中央部2箇所ベンガラの痕跡が認められる。

R D4801土墳 (第23・30図)

プラン 楕円形 規模 上端1.4m×1.0m、底面1.0m×0.65m 主軸方向 N43° E

掘込面 削平されている 検出面 III b層下部

埋土 自然堆積 A層一黒色土主体。粒状の褐色土を少量含む軟質。(スコリア粒少量含有)。

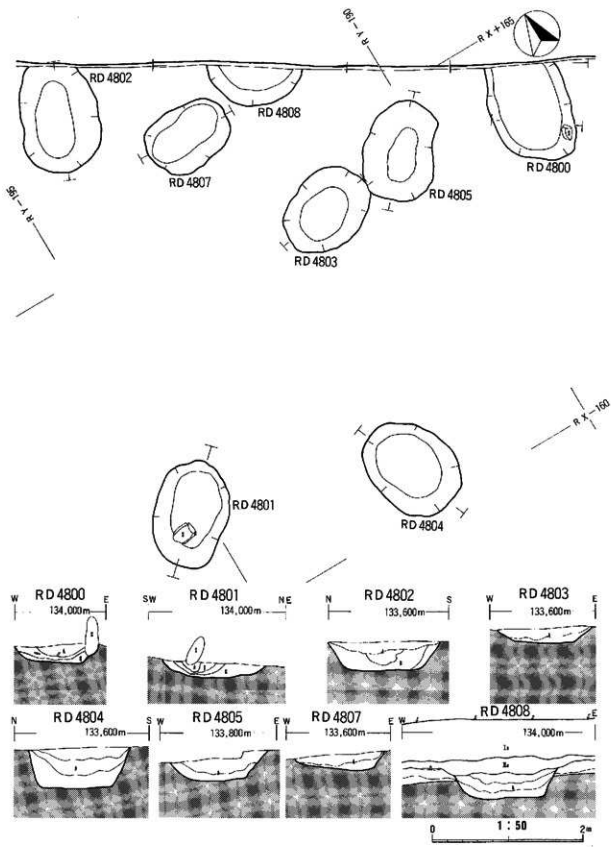
B層一黒色～黒褐色土主体。粒状の褐色土を含み、ややかたい(スコリア粒少量含有)。

C層一黒色上土。粒状の褐色土を微量含む、ややかたい(スコリア粒少量含有)。

壁の状態 なだらかに立ち上がる 墳高0.2m 底の状態 ほぼ平坦だが、あまりかたくない。



写真16 北東部土墳群全景(北から)



第23圖 RD4800~4805・4807・4808土壤

その他の施設 南西壁寄りに立石を検出。やや北東方向に傾き、埋土A層上に据えられている。直径20～25cmで、長さは40cmをはかる。

出土遺物 埋土中より石錐(第30図31)が出土したほか、土器はいずれも小破片である。

R D4802土坑(第23・28・30図)

プラン 楕円形 規模 上端1.4m以上×1.05m、底面1.0m×0.5m 主軸方向 N25° E

掘込面 削平されている 検出面 III b層下部

埋土 自然堆積 A層—黒褐色土主体。粒状の褐色土を含み、ややかたい(スコリア粒多量含有)。

B層—黒色土主体。粒～塊状の褐色土を含み、やや軟質(スコリア粒微量含有)。

壁の状態 外傾し立ち上がる 壁高0.35～0.4m 底の状態 ほぼ平坦だが、あまりかたくない。

出土遺物 土坑埋土からは縄文時代中期の土器破片が出土しているが、図示できるものは少ない。第28図7は深鉢の口縁部～体部破片で、隆沈線による横位の波状文、平行線文、懸垂文等が施されたもので、大木8b式期に相当するものである。石器では無柄凹基の石鏃(第30図26)、下辺に機能面をもつ敲打磨石(第30図34)などが出土している。

R D4803土坑(第23・28・31図)

プラン 楕円形 規模 上端1.25m×1.0m、底面0.75m×0.55m 主軸方向 E16° N

掘込面 削平されている 検出面 III b層下部 重複関係 RA4805と接するが、新旧関係は不明

埋土 自然堆積 A層—黒色～黒褐色土主体。粒～塊状の褐色土を少量含みややかたい。

壁の状態 なだらかに立ち上がる 壁高0.1～0.2m 底の状態 ほぼ平坦だが、あまりかたくない。

出土遺物 第28図8は体部が「く」字状に屈曲する小形深鉢、9は外反する口縁部の破片で、弧状沈線からみて、円筒上層式の影響を受けた土器か。他に敲石(第31図39)、上半部は欠失しているが、表裏側面共に平行沈線文の文様が施された下部部に貫通孔をもつ土偶(第31図44)などが出土している。

R D4804土坑(第23・29・30図)

プラン 楕円形 規模 上端1.4m×1.05m、底面1.0m×0.7m 主軸方向 N22° W

掘込面 削平されている 検出面 III b層下部



写真17-a RD4800土坑(立石状態)



写真17-b RD4800土坑(完無状態)

埋土 自然堆積 A層—黒色土主体。粒～塊状の暗褐色土を少量含みややかたい。

壁の状態 ほぼ垂直に立ち上がる 壁高0.52～0.55m 底の状態 ほぼ平坦だが、あまりかたくない。

出土遺物 埋土中より隆線および原体圧痕が施された山形突起をもつキャリバー様の口縁部（第29図10）、石匙（第30図28）、削器（同 29）、下辺に機能面および欠損面に磨面をもつ敲打石（同 35）などが出土している。

RD4805土壌（第23・29図）

プラン 不整楕円形 規模 上端1.35m×0.95m、底面0.75m×0.4m 主軸方向 N40° E

掘込面 削平されている 検出面 III b層下部

埋土 自然堆積 A層—黒色～黒褐色土主体。粒～塊状の褐色土を含み、ややかたい。

壁の状態 外傾し立ち上がる 壁高0.3m 底の状態 やや西向きに傾斜をもち、あまりかたくない。

出土遺物 第29図11～14が本土壌の出土遺物で、A₁～₂両層から検出されている。11は突起をもつ口縁部で、原体圧痕および隆線が施されたもの、12は原体圧痕のみ、13は沈線による文様をもつもの、14は口縁部がほぼ直立する小形深鉢である。石器では使用痕のある剥片等が出土している。

RD4806土壌（第24・29図）

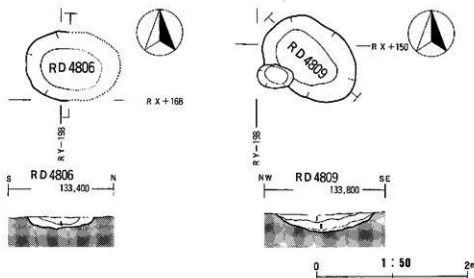
プラン 楕円形？ 規模 上端0.55m以上×0.9m、底面0.4m以上×0.55m 主軸方向 W5° N

掘込面 削平されている 検出面 IV a層上面

埋土 自然堆積 A層—黒色土主体。粉状の褐色土を少量含む軟質。

壁の状態 外傾し立ち上がる 壁高0.1～0.15m 底の状態 凸凹があり、あまりかたくない。

出土遺物 第29図15はやや肥厚した外傾する口縁部をもつもので、頸部には鋸歯状の沈線文がみられる。



第24図 RD4806・4809土壌

R D4807土壌 (第23・30図)

プラン 楕円形 規模 上端1.15m×0.85m、底面1.05m×0.5m 主軸方向 E 6° N

堀込面 削平されている 検出面 IV a層上面

埋土 自然堆積 A層—黒色土主体。粒状の暗褐色土を少量含みややかたい。

壁の状態 ならかに立ち上がる 壁高0.1~0.2m 底の状態 ほぼ平坦だが、あまりかたくない。

出土遺物 埋土中からは隆線および沈線が施された土器小片が少量出土している。石器では、背面に自然面を残すやや荒い調整の削器(第30図32)、端部および下面に敲打痕をもつ敲石(同 37)などが出土している。

R D4808土壌 (第23・29図)

プラン 楕円形? 規模 上端1.25m以上×0.55m以上、底面1.0m以上×0.35m以上

主軸方向 不明 堀込面 削平されている 検出面 II a層直下

埋土 自然堆積 A層—黒色〜黒褐色土主体。粒〜塊状の褐色土を含みややかたく、3層に細分される。

壁の状態 外傾し立ち上がる 壁高0.35m 底の状態 ほぼ平坦で、ややかたい。

出土遺物 第29図16~19が木土壌出土の遺物である。いずれも小形のキャリバー形深鉢の口縁部で、16は半截竹管による沈線文が施文されたもの、19は隆線および沈線に区画された頸部が無文帯のものである。

R D4809土壌 (第24・29・30図)

プラン 楕円形 規模 上端1.35m以上×0.95m、底0.9m×0.6m 主軸方向 N36° W

堀込面 削平されている 検出面 IV a層上面 重複関係 RA4801・4802に切られる。

埋土 自然堆積 A層—暗褐色土主体。粒〜塊状の褐色土を含みややかたい。

B層—黒褐色土主体。粒状の褐色土を含みやや軟質。

壁の状態 外側に大きく広がる 壁高0.1~0.2m 底の状態 中央がやや窪み、皿状を呈する。

出土遺物 第29図20~23が本土壌出土の遺物である。20は直立する肥厚した口縁部に瘤状の突起をもち、体部が膨らむ器形を呈する小形深鉢、21は沈線施文で口縁部が大きく外反するもの、22は外傾した口縁部に横位の半截竹管による沈線文が施されたもの、23は無文の鉢形土器かと思われる。石器では、無柄凹基の石鏃(第30図27)、削器(同 30)などが出土している。

R H4600配石遺構 (第25図)

位置 調査区北半中央部、14-B17・18区、14-C17・18区を中心とした範囲で、多数の礫が検出されている。

規模 東西4.0m、南北3.0mの範囲に礫群が集中しており、特にH4-B17・18区では分布密度が高く、東西1.5m、南北1.3mの長方形を呈する。

主軸方向 分布密度の高い長方形の集中区ではN5° Eをはかる。

検出面 V a層下面〜VI a層上面で検出されている。南半部のRH4601と同様に標高132.6~132.7mの地点で礫群が確認されている。

礫の特徴 礫を観察するとすべてが角礫で構成されており、集中区では15cm~30cmの大きさのものが多く使用され、周辺部には小礫が多い。なお地山のVI a層中には同様の石質の角礫も多く、RH4600につい



写真18-a RD4801土塊 (立石状態)



写真18-b RD4801土塊 (完備状態)



写真19 RD4802土塊



写真20 RD4803土塊 (手前)、RD4803土塊 (奥)

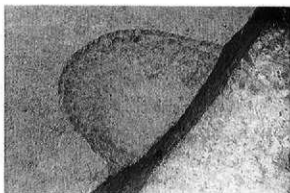


写真21 RD4806土塊

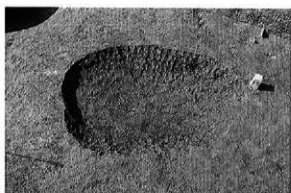


写真22 RD4807土塊

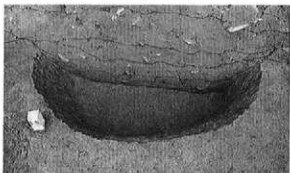
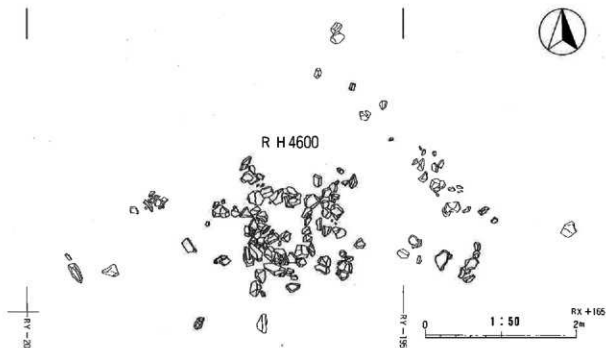


写真23 RD4808土塊



写真24 RD4809土塊



第25図 RH4600配石遺構

ても人為的配置かどうかは不明。

RH4601配石遺構 (第26図)

位置 調査区中央部、H4-Y19区・I4-A19区からH4-Y22区・I4-B22区にかけて幅2mほどで弧状に分布する多数の礫を検出した。出土範囲はその北半部のRH4600と同様の標高132.6~132.7mのラインに並行して確認されている。

規模 東西4.0m、南北7.5mの範囲に礫群が弧状に集中しており、特にI4-A19・A20区を中心とした地点とH4-Y22区、I4-A23区を中心とした地点に二分される。

主軸方向 東西方向の21グリッドラインを境として礫群を南北に二分してみた場合、北半部の集中区は北西-南東方向に多くまとまりをみせ、その方向はおおよそW33°Nをはかり、また南半部の集中区は北東-南西方向にまとまり、その方向はE20°Nをはかる。

検出面 礫群はVa層下面~VIa層上面で検出されているが、ややイレギュラーな出土状況を示す。

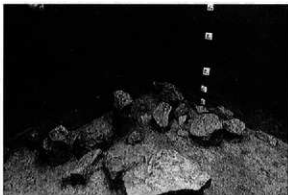


写真25 配石遺構の検出層位

礫の特徴 礫を観察すると大半が角礫で構成されており、I4-A19・A20区では拳大の大きさのものが多く使用され、南半部のH4-Y22区・I4-A22・B22区ではやや密に人頭大の礫が確認されている。なお礫群中最大のはI4-A19区で長さ60cm、幅40cmのものが確認されている。これらの礫群についてはRH4600と同様、地山のVIa層中に同様の石質の角礫も多いため、人為的配置によるものかどうかは不明である。

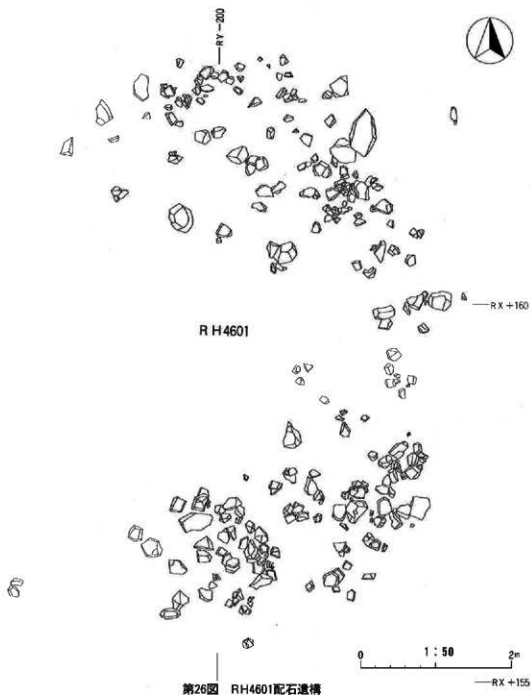


写真26 RH4600配石遺構



写真27 RH4801配石遺構

R Z 4600埋設土器遺構 (第27・29図)

位置 調査区北半中央部、H4-Y17区に位置する。 規模・構造 上下、両側面を自然石で囲った倒立の埋設土器遺構で、蓋石は50cm×30cm、底石は35cm×30cmの大きさの自然石で、その上に小形深鉢が据えられている。石組みの高さは約40cm、土器および石組みを埋設したピットは直径55cmをはかる。

検出面・掘込面 IV a層上面で検出されたが、本来はIII b層中から崩り込まれたものと思われる。

埋土 I層内内の堆積土は黒褐色土を主体。土器内の埋土は粒状の黒褐色土を主体とし、やや軟質。

埋設土器 (第29図25) 口縁部を欠損した小形深鉢で、頸部に1条の原体圧痕を巡らせ、体部に脹らみをもち、縦位の単節斜縄文(LR)を施している。残存器高21.5cm、体部最大径15cm、底径10cmをはかる。

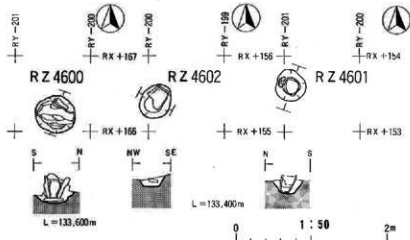
R Z 4601埋設土器遺構 (第27・29・30図)

位置 調査区北半中央部、H4-Y24区に位置する。 規模・構造 上端直径40cm、下端直径20cmのピットに正立の状態埋設土器が検出されている。 検出面・掘込面 IV a層上面で検出されている

埋土 土器内の埋土は上部から黒褐色土を含む暗褐色土、やや軟質の黒色土、黒褐色土の順に堆積し、ピットそのものの埋土は黒褐色土を主体としている。

埋設土器 (第29図24) 埋

設土器は口縁部から体部上半を欠損した深鉢で、底部からほぼ直立した器形を呈するもので、地文は横位回転の端部に結節をもつ単節斜縄文(LR)が施されている。残存器高28cm、体部最大径20.5cm、底径14.5cmをはかる。



第27図 RZ4600～RZ4602埋設土器遺構



写真28-a RZ4600埋設土器遺構



写真28-b 同左(蓋石除去後)

出土遺物(第30図36) ビット埋土から下辺一辺に機能面をもつ敲打磨石が出土している。

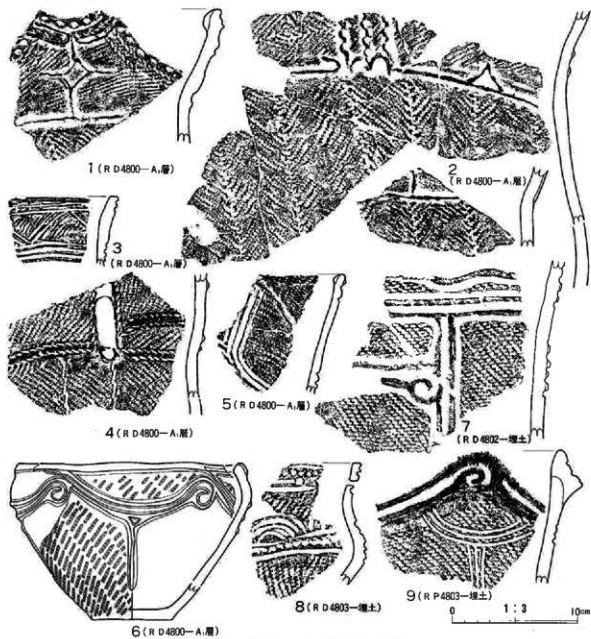
RZ4602埋設土器遺構(第27図)

位置 調査区南半中央部、H4-Y23区に位置する。

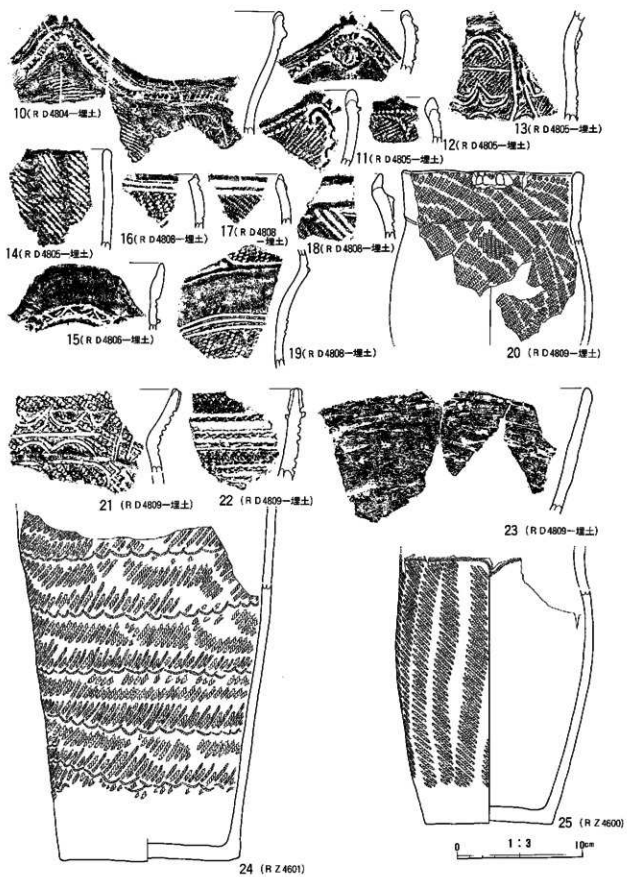
規模・構造 上端直径40~50cm、下端直径25~35cmの楕円形ビット内に30×25cmの平石および原体圧痕、結節縄文等が施された土器片が17点出土しており、埋設土器が存在した可能性が考えられる。



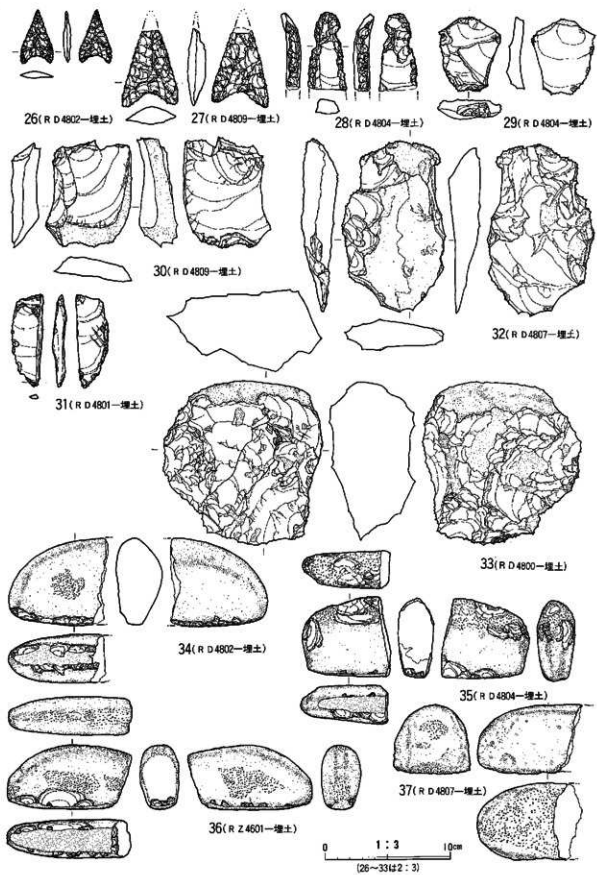
写真29 RZ4601埋設土器遺構



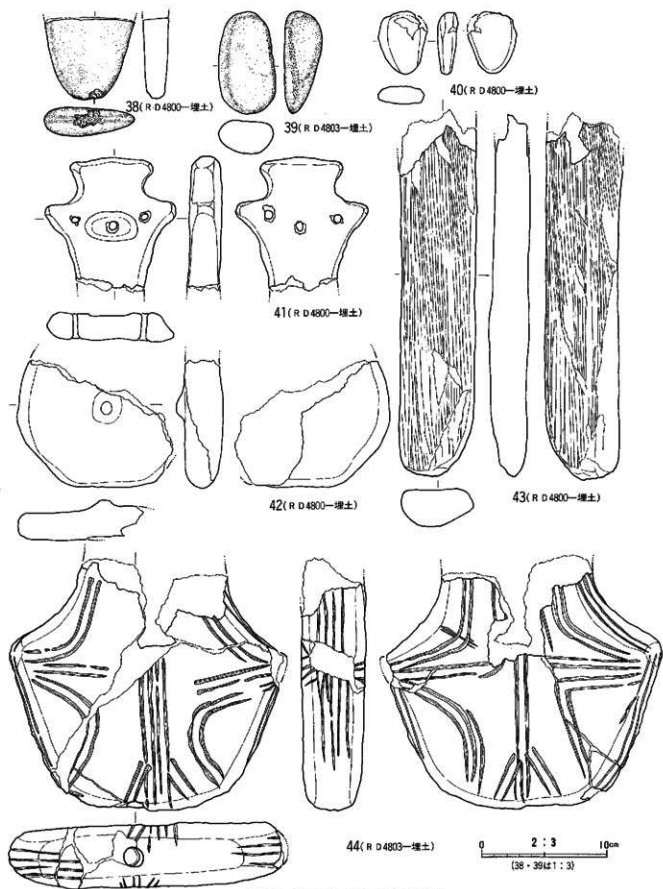
第28図 RD4800~4809土塊出土遺物



第29圖 RD4800~4809土坑出土遺物、RZ4600・RZ4602埋設土器



第30図 RZ4800~4802・4804・4807・4809土竊出土遺物



第31図 RD4800～4803土坑出土遺物

(3) 縄文時代の遺物包含層

調査区 第15次調査区では全域から縄文時代中期前葉から中葉にかけての遺物包含層が確認された。当該地区は遺跡の北西部の緩傾斜面に位置し、標高は約134mで遺構密集地の北東部の第5・12・18次調査区とは約1～2mの比高差をはかる。

調査区内はかつて畑地ないし水田として利用されており、地表面から20～40cmの深さまでは耕作土として使用されていたが、それ以下の堆積土の保存状況は極めて良好で、中期の遺物包含層はほぼ全域で約30～40cmの厚さで確認されている。

遺物包含層の状況 本調査区における縄文時代の遺物包含層は後期完新世火山灰である小岩井浮石（Kp-Ak-h）上部の堆積土中で確認されており、遺物を有する堆積土層は、上部からⅡa・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅴa層の5層となっている。なお、隣接する大新町遺跡ではさらに下部のⅥ層中から草創期の爪形土器群が検出されているが、本地点では確認されていない。

Ⅰ層-耕作土（Ⅰa層）

Ⅱ層-黒色～黒褐色土主体 Ⅱa層-黒褐色土で、粒～塊状の褐色土をやや多く含む。スコリア粒も少量含まれ、やや軟質。縄文時代中期～後期の遺物を包蔵するが、本地点では大半が削平を受けている。

(10Y R2/1～2/2)

Ⅲ層-黒褐色～暗褐色土主体 Ⅲa層-黒褐色～暗褐色土で、塊状の黄褐色～褐色土をやや多く含む。

(10Y R2/1～2/3)

スコリア粒および炭化物も多く、多量の遺物を包蔵する。時

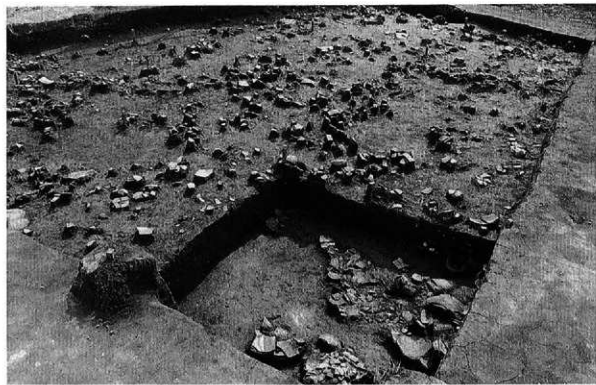


写真30 遺物包含層検出状況（Ⅲa層上面）

期的には、大木8 a 式期に相当する土器が半数以上を占めているが、地点によっては前後の大木7 b・8 b 式期の遺物も検出されている。層厚は平均して、30~40cmをはかる。

III b 層—黒褐色土で、粒~塊状の褐色土を含む。スコリア粒および灰化物も多いが、遺物の包蔵量はIII b 層に比べやや減少する。時期的には、上層とあまり変化はみられない。層厚は東半部でやや厚く30cm、他は平均して10~15cm程をはかる。

IV 層—黒色土主体

(10Y R1.7/1~2/1)

IV a 層—黒色土を主体とし、粒状の褐色土およびスコリア粒を微量含む、やや軟質。同層上面には少量ではあるが大木7 a・7 b 式期の遺物が包蔵されるが、中間層以下は無遺物層となる。層厚は平均して、20~40cmをはかる。

IV b 層—黒色~黒褐色土で、粒~塊状の褐色土を多く含むかたく、スコリア粒も多い。同層から遺物の出土はみられない。層厚は平均して、10~20cmをはかる。

V 層—黒褐色~暗褐色土主体

(10Y R2/2~3/3)

V a 層—黒褐色~暗褐色土を主体とし、塊状の褐色土およびスコリア粒を少量含む漸移層。本地点では縄文時代早期に属する貝殻文土器が少量出土したのみで希薄であるが、隣接する大新町遺跡では人量の押型文・沈線文土器が検出される層位である。

VI 層—褐色~におい褐色土主体

(10Y R4/4~5/4)

VI a 層の上部を検出したのみで、粘性の褐色を呈し、塊状の黒褐色土を部分的に少量含む。下部は含まれるスコリア粒

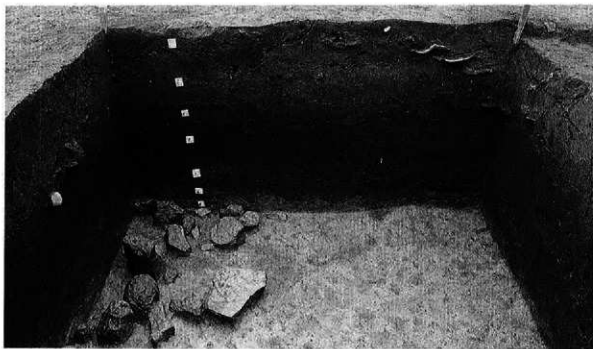
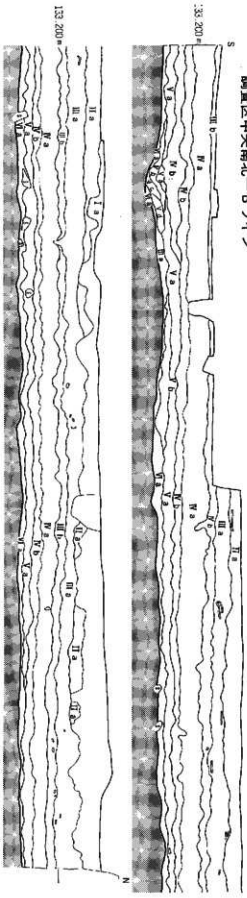
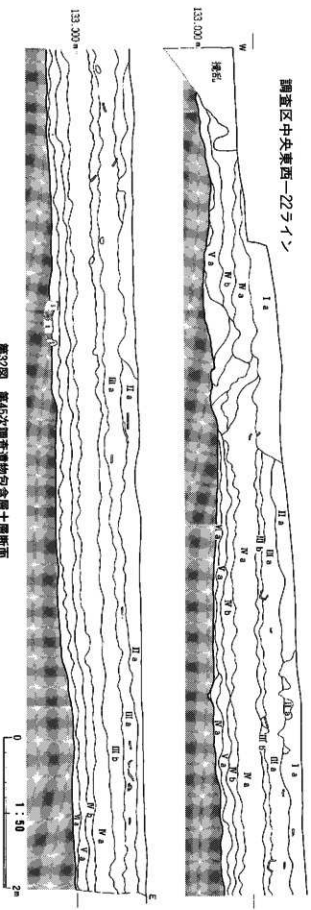


写真31 遺物包含層土層断面 (H4-Y22区)

調査区中央南北-10ライン



調査区中央東西-22ライン



第32図 第45次調査遺物包含層土層断面



写真32-a (通物包含甕土器出土状況：H4-Y20-Ⅲa層)

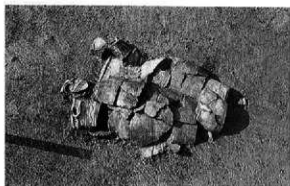


写真32-b (同上：H4-E19-Ⅲa層)



写真32-c (H4-Y19-Ⅲa層)



写真32-d (土偶焼出土状況：H4-Y25-Ⅲa層)

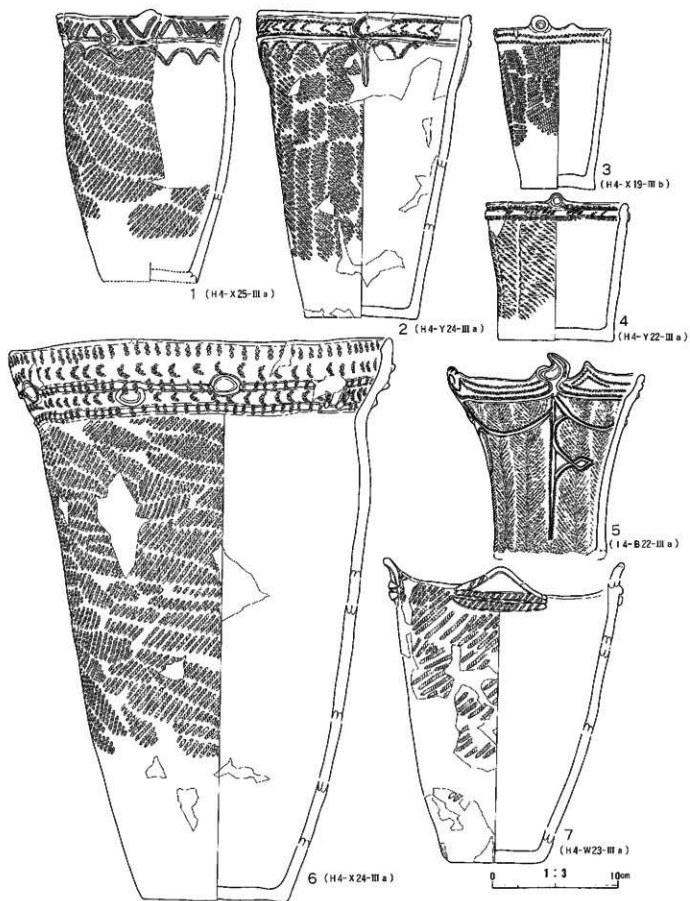
の粒径も大きくなり、全体的にしまりがあり、かたい。下部の小岩井浮石（VIb層）は従来「分火山灰」に包括されるもので、秋田駒ヶ岳を噴出起源とし、上部に赤褐色の角張った粗粒浮石（層厚10～30cm）、下部に青灰色の粗粒浮石（層厚5～10cm）を伴う。

遺物出土状況 出土遺物のうち、土器は縄文早期から中期および後期に属するものも一部検出されている。出土点数が膨大なため、紙面の都合上ここでは復原・実測できた中期の上器の一部のみを掲載することとし、石器群を含めた全体の遺物については新たに別の機会に公表することとしたい。

土器 (第33～40図) 1は山形の小突起をもつ口縁部にハの字状の短沈線および波状の連弧文が施された小形深鉢で、体部の縄文地文は横位の単節縄文（LR）が施されている。口径15cm、推定底径7.5cm、器高21.5cmをはかる。

2～5は口縁部ないし体部に原体圧痕を使用した土器である。2は底部から口縁部まではほぼ直線的に外傾しながら立ち上がる器形を呈する深鉢で、細い降線と平行に区画された口縁部文様帯に沿う原体圧痕ならびにくの字状の連続した原体圧痕が施されたものである。また口縁部直下には隆線による懸垂文を貼付け、1と同様の連弧文が原体圧痕により施されている。口径17cm、底径9cm、器高24.5cmをはかる。3・4は口縁部に円形の貼付けの突起をもつ小形深鉢で、口縁部には横位方向に2条の原体圧痕が巡る。5は大きく外反する波状口縁をもつ小形深鉢で、口縁部にはノの字状の貼付けが施され、さらに原体圧痕を伴う隆線による懸垂文・弧状文および刺状文などが施されたものである。縄文地文は縦位の無節の羽状縄文を施文している。

6は口縁部に隆線による平行線文・円文および原体圧痕が施されたもの、7は降線による山形文の貼付けをもつ小形深鉢である。



第33图 第45次調査遺物包含層出土土器 (1)

8～15は沈線施文の深鉢の一群である。器形は体部からほぼ直線的に外傾しながら立ち上がるもの(8・9・12)、やや屈曲して外反するもの(11)、やや屈曲して内湾するもの(14)、口縁部が外反し体部に丸みをもつもの(10・13)、口縁部から体部下半まで緩く内湾するもの(15)などがある。うち8は透かしの大形把手をもつもので、口縁部直下に縦位の原体正瓶、体部文様帯は隆線および沈線で直線的な平行線文、懸垂文を主体として構成されている。9は4単位の小渦巻文を配した半縁の口縁部をもつもので、円形刺突列、剣日状の短沈線などが施され、体部は平行沈線文、連弧文などがみられる。10は口縁部に隆線による逆S字状文をもつもの、13・14は複合口縁で、13は小波状、14は大波状口縁を呈する。15も口縁部に隆線によるS字状文の貼付けをもつ。これらの土器の体部のモチーフは、平行沈線、波状沈線、2～3条1組の波状ないし平行の懸垂文、弧状文およびあまり発達しない渦巻文などを特徴としている。

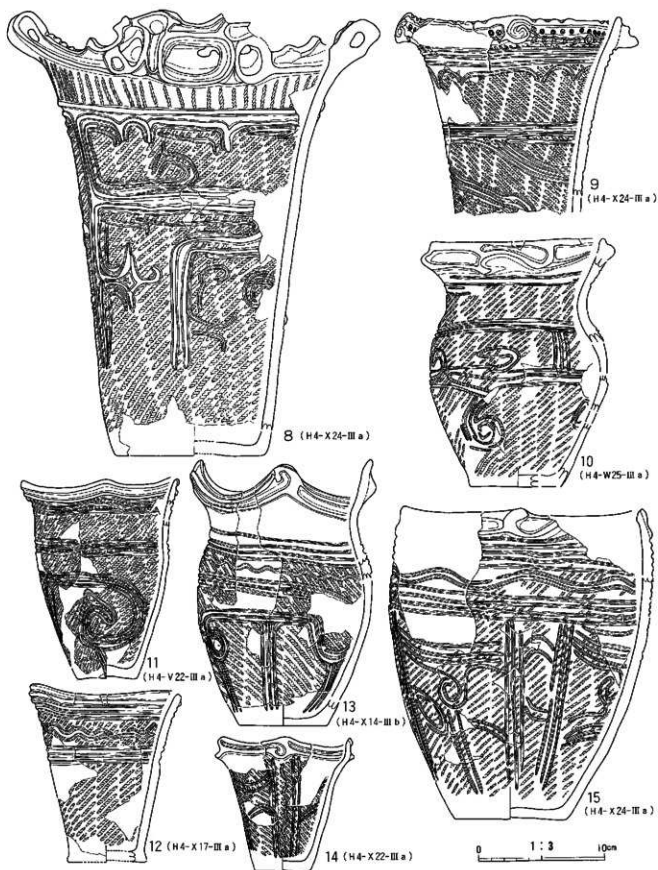
16～29はキャリバー形深鉢である。16は大形のC字状把手をもつ器高62cm以上をはかる大形のもので、口縁部文様帯は一端に渦巻文を配した弧状文を連続させて波状文を構成したもので、17・18は緩い山形口縁で、隆線によるC字状ないし双眼状の貼付けをもつ。29は口縁部の一部に鱗状の突起をもつもの、19・20～22・24は文様帯が口縁部のみに施されたもので、沈線による波状文の波頂下に渦巻文を配したもので、楕円区画の端部に緩い渦巻文を配したものがみられ、体部は縄文地文のみ、23は全面縄文地文のみ、25は口縁部縄文地文で、体部に沈線による円文・刺状文等を配したものである。

30～34は沈線施文の口縁部の外反する深鉢ないしキャリバー形深鉢の頸部以下のものである。30のみが体部が膨らむ器形で、やや外反する口縁部が短いもの、31・33は頸部の平行沈線文から波状ないし平行の懸垂文を垂下させたもの、34は外反する口縁部が無文のもので、体部上半に3条1組の平行沈線文、さらに下部に大渦巻文を施したものである。

37～45は隆線ないし縄文地文のみのもので、41は体部中位が屈曲する算盤玉状の器形を呈する鉢形土器で、口縁部および屈曲部に2条1組の隆線が施されたもの、42は口縁部直下に橋状把手、体部中位に平行の隆線を施した樽形土器で、地文をもたない無文のものである。

46～56は浅鉢である。底部からほぼ屈曲しないで外傾しながら立ち上がるもの(46)、口縁部がほぼ上方に向いて立ち上がるもの(49・53・54)、緩く内湾するもの(47・48)、くの字状ないし大きく内側に屈曲するもの(50～52・55)などがある。46が原体正瓶を用いているほかは、すべて隆線による文様が施されたもので、口縁部に波状隆線を貼付けたもの(47・53・54)、体部上半に波状隆線を施したものの(49・50)、注口をもつもの(52)、橋状把手をもつもの(55)などがある。

土製品(第41～45図) 1～12は土偶である。1は板状土偶の胴部で、下端には股を表現した凹みをもち、臍を表現した突起を中心として放射状ないし体形に沿うように半截竹管による沈線文が施され、また臍下部および凹みにも突起がみられる。2は小形の土偶で、頭部および両腕部を表現したもので、両面ともに肩部から下端中央に向かって沈線が引かれ、腕部には上下方向に貫通孔がみられる。3は口を表現した指頭状痕による楕円形の凹みおよび臍を表現した大形の突起を特徴とし、眼・口および両腕部に貫通孔をもつ。胴部には縦位を主体とした沈線文、腕部にも上・下から斜位に沈線文が施されている。4は大形の板状土偶で、腰部の輪郭に丸みをもち、下端には股を表現した凹みをもつ。文様は沈線で、臀部を表現した渦巻文および臍を表現した突起を中心として放射状に施文されており、側縁部にも短沈線が描かれている。5は上部に2つの貫通孔、また竹管状工具による縦位方向の円形刺突列が施され、背面には刺突文に加え、縮歯状沈線もみられる。6は右腰部の破片で、体形に沿って押



第34圖 第45次調査遺物包含層出土土器 (2)



a. (H4-X17-Ⅲa層)



b. (H4-Y23-Ⅲa層)



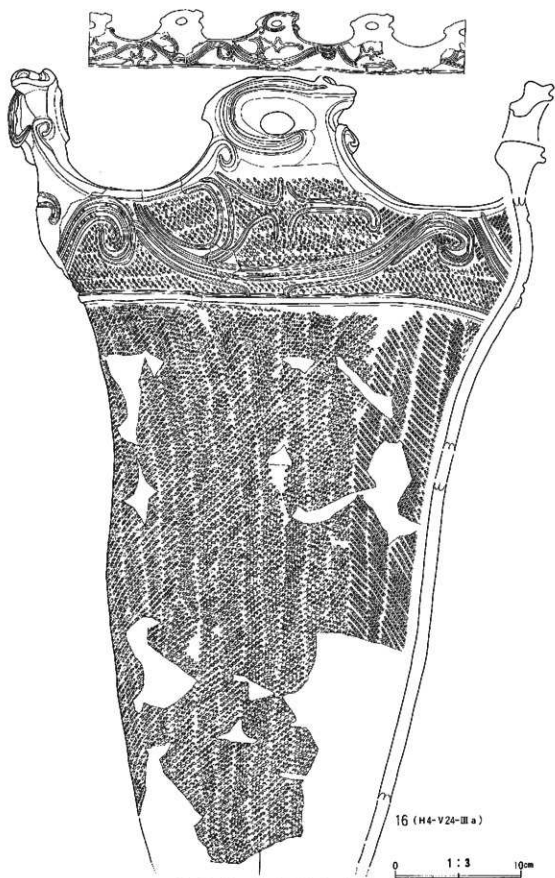
c. (I4-B19-Ⅲa層)

写真33 遺物包含層土製品・石製品出土状況

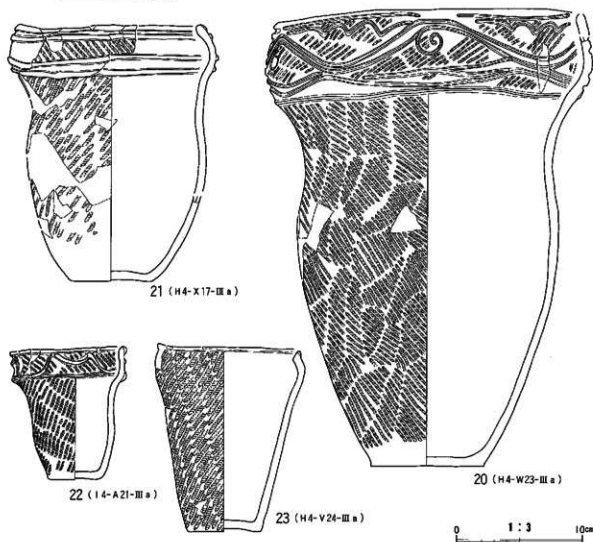
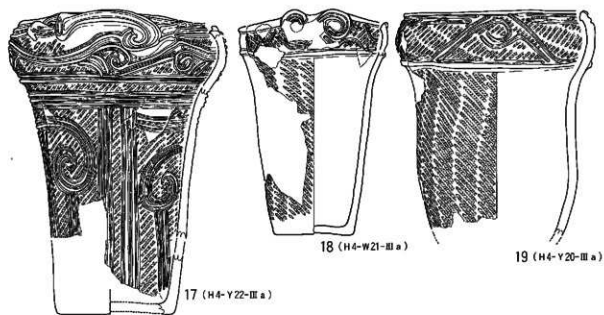
引き状の半裁竹管による刺突列が施され、髻部は沈線による渦巻文で表現されている。7は臍を中心としてX字状に原体圧痕が交差し、下端部で渦巻文を構成し、背面では体形に沿った3条1組の原体圧痕、その内側に鋸歯状文、さらに下部に原体圧痕の渦巻文により髻部が表現されたもの、8も側縁部ないし体形に沿うように原体圧痕が施されたもので、形状は頭部が皿状に広がり凹をもつ逆三角形を呈し、顔面は隆線によりY字状に鼻と眉を表現している。胸部は真横に突き出し、乳房の下部にも貫通孔をもつ。9はソケット状に差し込んだ頭部が欠落して凹をもつもので、中央部に隆線による眉・鼻、刺突により目・鼻孔等が表現されている。10も楕円形の皿状の頭部をもつもので、8・9と同様に胸部が真横に突き出す形状で、乳房下部にも貫通孔をもつ。11は下半部が末広がり、自立できる形状の土偶で、側縁部から背面に縄文地文をもつ。腹部中軸線上に隆線を垂下し、体形に沿って沈線文が巡るものである。12も11と同様に自立できる形状のもので、足の指まで表現されている。

13～20は耳飾ないし有孔土製品である。13は直径より長軸方向に長い有孔土製品、14は側面に沈線が施されたもの、15・16は厚さのない円玉状の上製品である。17は両面に凹みをもつ有孔土製品、18は人形の滑車状の環状耳飾、19は滑車形耳飾で両面中央部の凹むもの、20は鼓状の耳飾で、片側に環状の刻目が施されたものである。21は片面に沈線が施された蒜石状土製品、22～24は垂飾品と考えられるもので、22は側縁上部に孔が穿たれたペンダント状のもの、23は円形で平坦面に二つの孔が穿たれたもの、24はいわゆる三角形土製品で、湾曲した表面に縄文地文および貫通ないし木貫通の小門孔が各辺や中央に穿たれている。25・26は長軸側に貫通孔をもつ上頸状のもの、27は底面および側縁に凹みおよび斜位方向に穿たれた円孔をもつ石冠状土製品で、側面には2条1組の縦位の沈線が施されている。28～30は手捏ねのミニチュア土器、31・32は斧状土製品、33～36は土器片を再利用した土製円盤で、沈線文および縄文地文をもつものである。

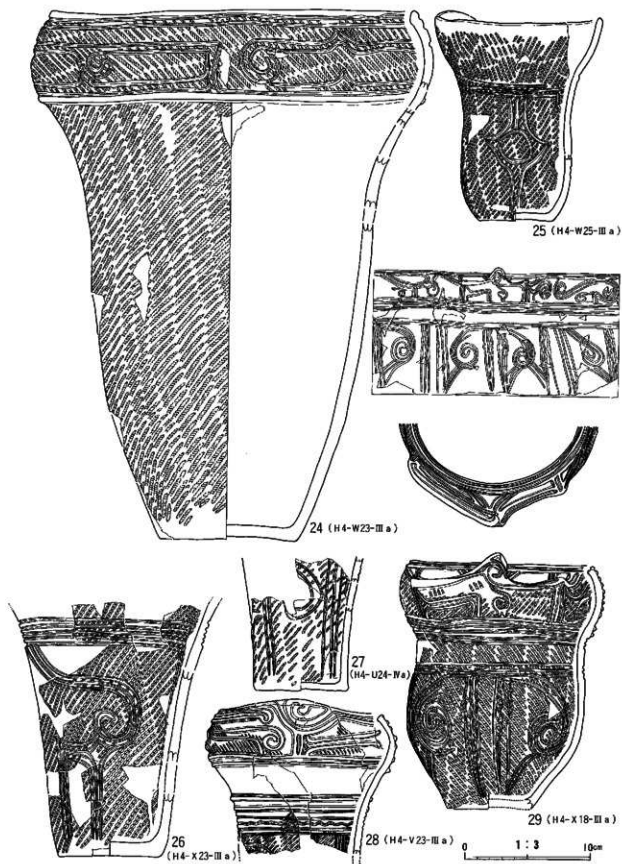
石製品 (第46図) 37～40・43はペンダント状の有孔石製品である。37は四角形の厚手のもので、平坦面に穿孔しているもの、38は周縁がやや湾曲した正三角形を呈するもので、上辺に穿孔しているもの、39は片面が丸く、もう一方が平坦で一文字の溝状沈線をもつもの、40は平坦面に二つの孔が穿たれているもの、41は調整時の擦痕をもつ板状の小片で、未製品か。42は鈎状の大形環状石製品で、全面に成形時の沈線状の深い擦痕が認められる。43は面取り成形の擦痕を残した大形の有孔石製品、44・45は五ないし六角形に面取り成形された管玉状石製品、46は両面に溝状の沈線が描かれた耳飾か。47～51は不整形な自然石を利用した有孔石製品である。明らかに穿孔時の擦痕が認められるものもある。



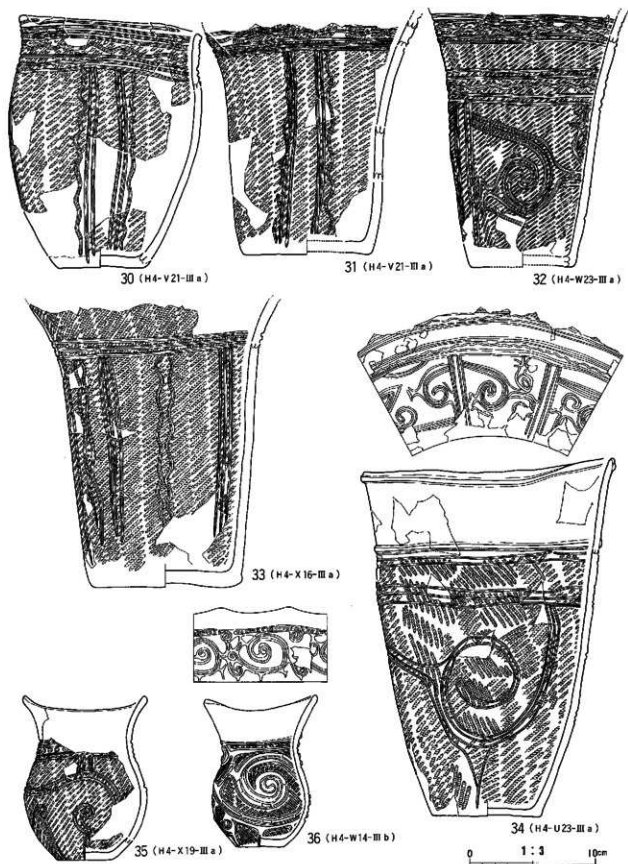
第35图 第45次調査遺物包含層出土土器 (3)



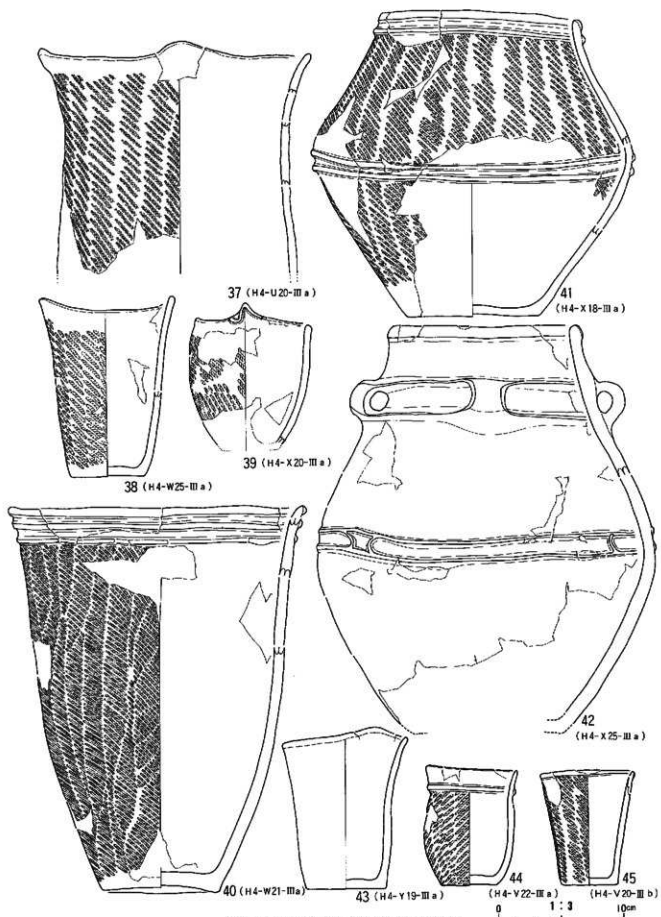
第38図 第45次調査遺物包含層出土土器 (4)



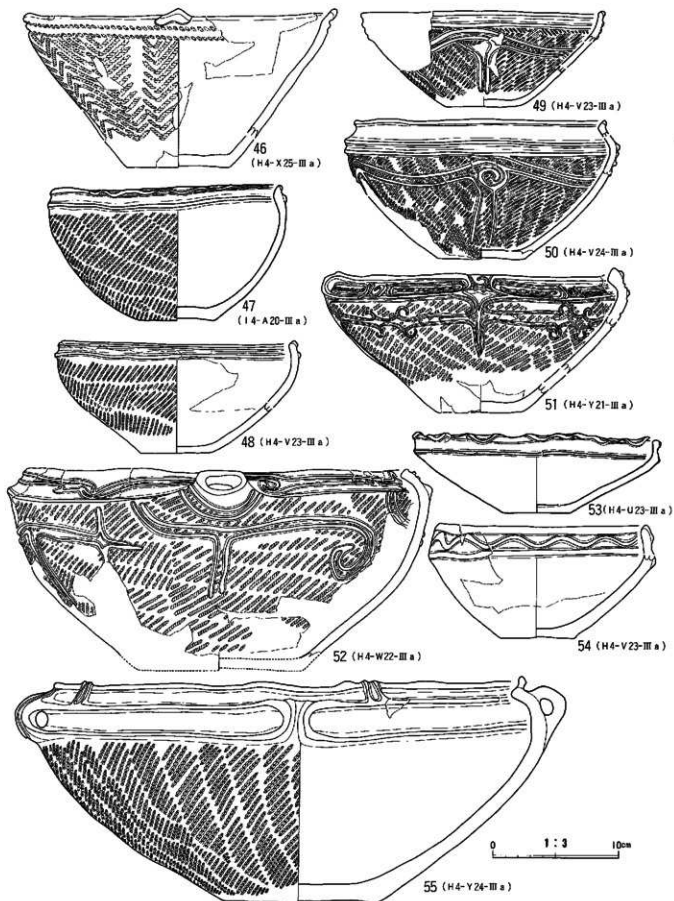
第37圖 第45次調査遺物包含層出土土器(5)



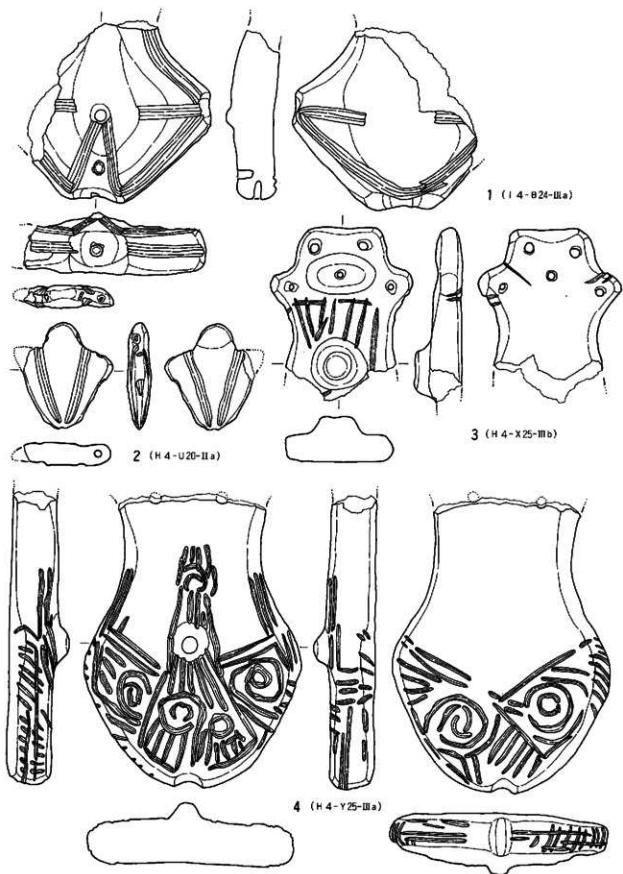
第38图 第45次調査遺物包含層出土土器(6)



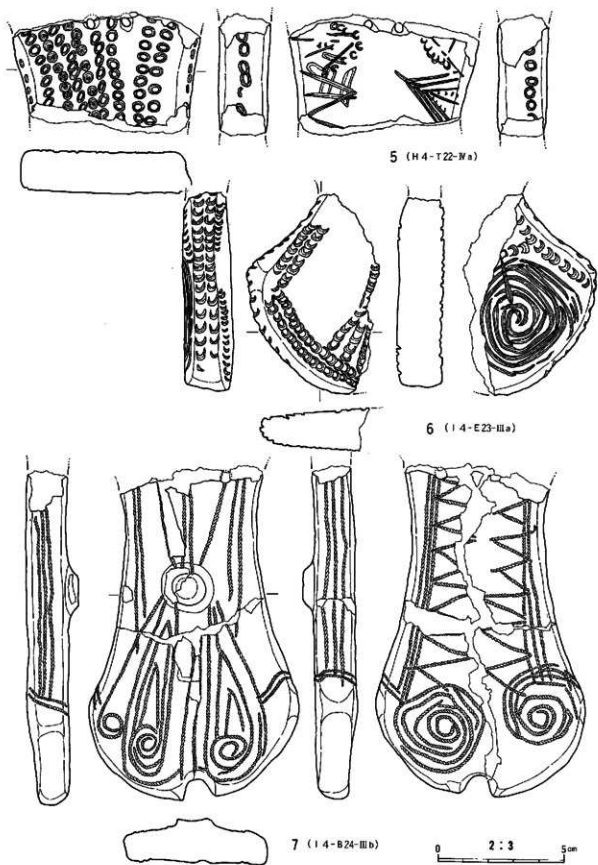
第39圖 第45次調査遺物包含層出土土器 (7)



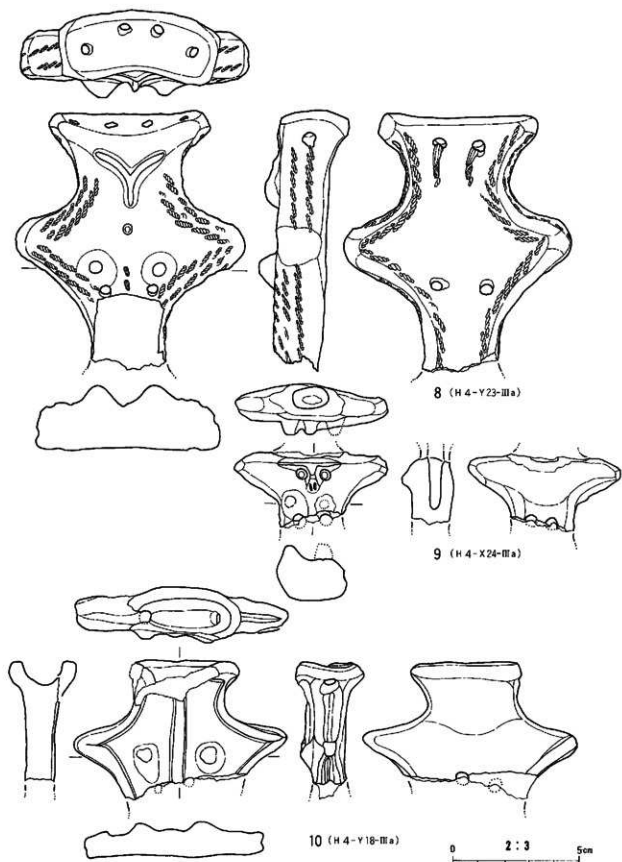
第40圖 第45次調査遺物包含層出土土器 (8)



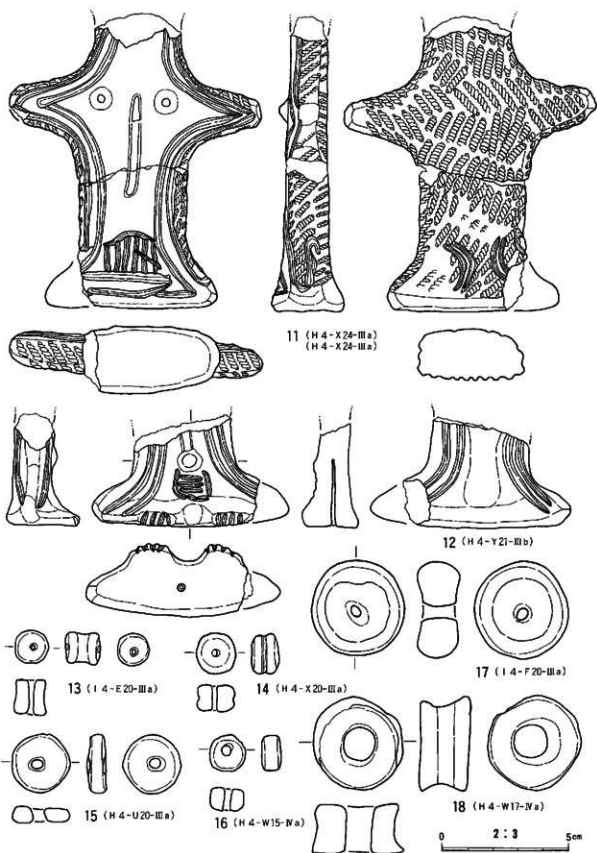
第41圖 第45次調査遺物包含層出土土偶(1)



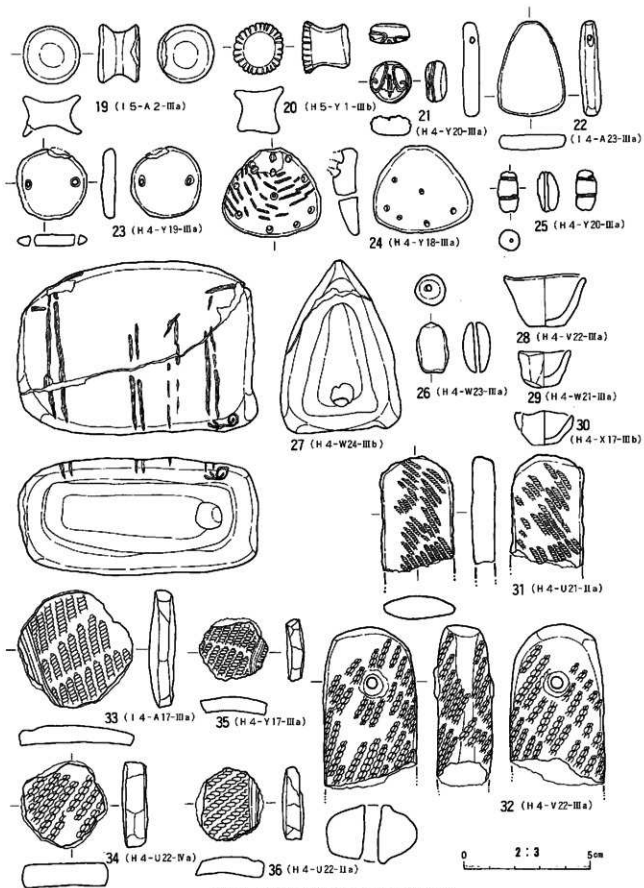
第42圖 第45次調査遺物包含層出土土偶(2)



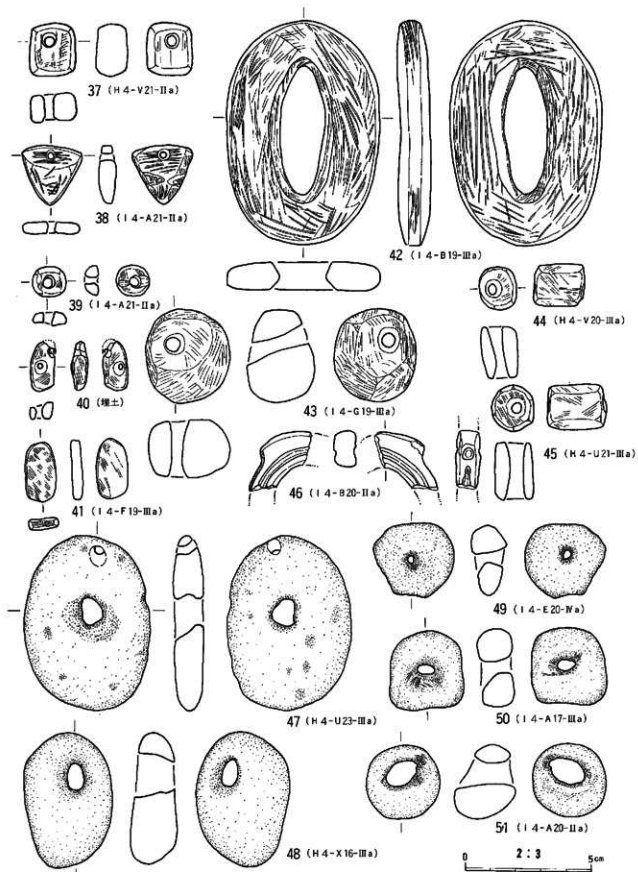
第43图 第45次調査遺物包含層出土土偶(3)



第44圖 第45次調査遺物包含層出土土偶(4)・土製品(1)



第45図 第45次調査遺物包含層出土土製品(2)



第46図 第45次調査遺物包含層出土石製品

2. 調査のまとめ

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡5棟、墓塚と考えられる土壌10基、配石遺構2基、埋設土器遺構3基および調査区全域に形成された縄文時代中期を主体とする遺物包含層などである。

竪穴住居跡 竪穴住居跡はいずれも調査区東半部、特に南東部から集中して検出され、他の地区はやや低地にかかるため住居跡は存在せず、墓塚群ないし遺物包含層が形成されている。住居跡の形態については、R A4701を除き、その他の住居跡は調査区外にかかるため全体のプランは確認できないが、R A4703は隅丸長方形、R A4700・4704は円形、R A4701は楕円形、R A4702は人形の卵形ないし楕円形になるものと考えられる。またこれらの住居跡の年代については時期決定できる資料が少なく根拠に欠けるが、床面遺物からみてR A4703が大木7 b式期で一番古く、次にR A4700が大木8 a式期、R A4701・4702・4704が大木8 b式期に相当し、さらにこれらは(古) R A4704→R A4702→R A4701(新)の順に細分されようである。

墓塚 調査区北東部を中心として、土壌が10基検出されている。それぞれ検出面からの深さには差異はあるが、平面形は楕円形を基調とし、規模は長軸1.25～1.5m、短軸0.85～1.05mをはかり、ほぼ同一の形状を呈する。主軸方向についてはまとまりがなく、北東→南西を主軸とするもの5基、北西→南東を主軸とするもの2基、東→西を主軸とするもの2基、不明1基となっている。これらの土壌群についてはR D4800・4801にみられる立石の存在および出土遺物からみて「墓塚」の可能性が高く、時期についてはそれぞれの検出面がⅡ a層直下、Ⅲ b層下部およびⅣ a層上向とややまちまちだが、全体的に中期中葉の大木7 b・8 a式期の遺物包含層が覆っていることは確実であり、大木7 b式期ないしそれ以前に相当する可能性が考えられる。

遺構配置 今回の調査成果から今まで確認されていなかった集落内での墓塚の存在が明らかになった。調査区周辺での遺構の変遷は、①集落縁辺部の緩傾斜面に立地する土壌墓群(大木7 a・7 b式期)→②同時期～大木8 b式期までの遺物廃棄場所→③大木8 a・8 b式期の住居区域が拡大し、土壌墓ないし遺物包含層と重複する状態の時期へと移行をみせている。

過去の調査成果からも遺跡の両端部から内端部の緩斜面には遺物包含層が存在するのが認められてはいたが、今回の大木8 a式期を主体とする遺物包含層を形成した時代の生活の場については調査成果から推察して、第5・12・15・18次調査区を中心とした今次調査区の北東部の地点に求められるものと思われる。

遺物包含層 層厚30～40cmのⅢ a・Ⅲ b層中からは全体の検出個体数の7割以上に相当する数の大木8 a式期に所属するの大量の土器が検出され、また前後の時期に相当する大木7 b・8 b式期の土器群も相当量検出された。調査面積がわずかに380㎡のわりに、出土遺物の総数は完形土器約300余点、その他の土器破片等がコンテナ250余箱という膨大な出土量を数え、本調査区は同遺跡内でも一級の密集地点であると言える。



RA4700 (第6図13)



RA4701 (第9図1)



RA4701 (第9図3)



RA4701 (第9図4)



RA4702 (第14図1)



RA4702 (第14図2)



RA4702 (第14図3)



RA4703 (第20図2)



RA4703 (第21図35)



RA4704 (第21図43)



RZ4601 (第29図24)

写真35
遺物包含層
出土土器 (1)



(第33図1)



(第33図2)



(第33図3)



(第33図5)



(第33図6)



(第33図7)



(第34図8)



(第34図9)



(第34図10)



(第34図11)



(第34図12)



(第34図13)



(第34図14)



(第34図15)



(第35図16)



(第36図17)



(第36図18)



(第36図19)



(第36図21)



(第36図20)



(第36圖 22)



(第36圖 23)



(第37圖 24)



(第37圖 25)



(第37圖 29)



(第38圖 30)



(第38圖 34)



(第38圖 36)



(第39圖 38)



(第39圖 39)



(第39圖 40)



(第39圖 41)



(第39圖 43)



(第39圖 44)



(第39圖 45)



(第40圖 46)



(第40圖 50)



(第40圖 47)



(第40圖 51)



(第40圖 55)

大 館 遺 跡 群

大 館 町 遺 跡

— 平成4年度発掘調査概報 —

平成5年3月31日 発行

発 行 盛岡市教育委員会
〒020 岩手県盛岡市津志田14-37-2
TEL (0196) 51-4111 内線 7353

印 刷 勝熊 谷 印 刷
盛岡市上田一丁目6番49号